原風景へ

小林和太

1

十二歳のとき、墓地の林でモズの巣を見つけたことがあった。茂みの中に隠されている円形の巣の中には三羽の赤びっきがうごめいていた。その中の一羽は体が少し大きく、きかない顔で暴れているみたいだった。巣の外に落ちたのがいて、首を伸ばしたまま口を開けて死んでいた。

翌日、外に落とされた一羽には蟻がたかっていた。

巣の中の二羽は争っていた。体全体が赤茶色で、頭と背中が黒ずんでいる大きい方の一羽が、老女のようなしわしわの細い首を伸ばし、後ろ向きになって、小さいのを攻撃していた。平たくくぼんだ背中で性懲りもなく押していた。押されるたびに小さい方は巣の縁をつたって逃げていた。

卵からかえったばかりの雛が、目を虚空に向けて、何か恐ろしい意図をもって行動しているように思えた。

次の日、昨日まで押されていた小さい方は巣の外に押し出され、露に濡れ固くなっていた。ぜんぶ突き落として巣の中に一羽だけ残った大きい雛は、覗いている私に口をあけ餌をねだった。その真っ赤な口は血をのんだように不気味に見えた。

何日かして行ってみると、赤びっきには濃い灰色がかった毛が生え、巣からあふれでるほど大きな体になっていた。

カッコウ鳥だった。

モズの巣の中でカッコウが育っていたのだ。

幼鳥のくせに、親モズの二倍はあった。

目に黒い縞のあるモズが、褐色の羽をひらめかせながら

終日カッコウのいる茂みに餌を運んでいるのを、私は畑を耕しながら遠くからじーっと見ていた。

託卵の知識のなかった十二歳の子供の私には、それはすごく恐ろしい光景に映った。

せっかく育てた子供が自分の本当の子でないだなんて……。人間の世界でもこれ以上に不可解なことがあると思った。自分の本当の子供を巣からつついて落とし、他人の子をもらって育てる。もしそういう親がいたとしたら、それはどういう人格像をもった人間なのか。

2

「こら、何しているの。早くここに入りなさい。びしょ濡れになって、もう……。子猫、風邪をひくでしょ」

下で猫を叱りつけている妻の声を耳にしながら私はうとうとしていた。叱っているがどこか優しい。雨の庭にわざわざ出てのら猫の小屋をつくっているらしい。

十日ほど前から、二匹の子猫を連れた親猫が崩れたブドウ棚の下に住みついていた。面相が悪く、どこか変てこで、育ちがわかる根性のひんまがった顔をしていた。わたしも反逆して、外へ出る度にすがめた目をあてていた。黒とぶちの子猫にいたっては、私の顔を見ただけでどこかに姿を隠してしまう。その警戒心の強いことといったら、もの陰からじーっと様子をうかがっているのが手に取るようにわかる。

何となく、あっちを見、こっちを見、人のいないのを確かめ、竹の棒で追い回したい感じにさせる猫だった。

「あぁ、逃げていってしまった。すばしこくて駄目。母さん、この猫ちっともなれないよ」

娘まで雨の中に出ているらしい。

私は何となく不安になって居間に下りていった。妻と娘が傘をさして、雨でふだんより濃い緑にくすんで見えるグミの木の下に箱を置き、うろうろしていた。

「せっかくの休日なのに、体を休めたらいい。のら猫のために雨の中に出ることない。ほっておけって、第一、そんな箱、猫小屋になるか。雨のときはかえって滴がはね返るし、風のときは吹き飛ばされるぞ」

猫小屋にならないかしら……。

ビニールでおおった箱を、かわいそうでという顔つきで妻はしばらく見つめた。それから、訴えるように私に目を向けてきた。

「ダンボールの箱にぼろを入れ物置の中に置けばいい。戸を十センチぐらい開けておけば、そのうち寝るようになるかもしれん」

思案気な妻の目にうながされうっかりそう口走ってから後悔した。どこか面白くない。私は味噌汁をあたため、一

人で遅い朝食を摂った。
妻と娘は家の中に入って来て、二階を上がったり下りたりしながら、何かごそごそやりはじめた。お茶をいれようと思ったが、ポットは空だった。私はやかんをガスコンロにのせた。
「おいおい、やめてくれって、おれのセーターを猫の敷布団にするな」
「もう、捨てていいでしょう。十年も着てすり切れているんだから」
「屋根の雪おろしをするとき使う。猫なんかに、死んでもやるものか」
私は口をとがらせ、セーターを取り上げた。
娘がかわって自分の古着をダンボールに敷き込んだ。
「物置の戸を閉めないでしょうね。あんたは右を向いていて左に手を出す、ときに突拍子もないことをする人なんだから」
さすが三十年以上連れ添った古女房、うがったことをいう。魅力的な連想を呼びおこさせる言葉だった。
小学生のころ、村の悪ガキだった私は退屈しのぎにやった、猫を石油缶にいれ、蹴とばしたり、転がしたりすると、逆さ目になって小便ちびるのを思い出した。
「まさか。世の中には親切な人もいて、戸が開いていると閉めていく人もいるぞ。猫が干乾びて死んでも、おれのせいではないからな」
私は和やいだ気持ちになり、鼻の孔を広げて言った。
雨の中、妻は金づちと釘を持ち出してとんとん叩き、戸を閉められなくした。
娘が窓を細く開けカーテンの隙間から、物置の入口に置いた餌を見張っている。
どうも、娘は猫好きらしい。缶詰を買ってきてここ何日か餌づけをしていた。餌は取られるが、さっぱりなつかない。人見知りする猫だと娘は口をとがらせていた。
ずーっと前、娘が小学校に入ったころ、子猫を拾ってきたことがあった。目が開いたばかりの赤びっきだった。一日中なにも口にせず寒いところに捨てられていたとみえ、声も出ないほど弱っていた。妻が牛乳を飲ませたが、飲む力もなくなっていた。
「もうすぐ死ぬ、父さん捨ててくる。いいな。猫は絶対に飼わない……」
私は声を張り上げた。娘はかわいそがり涙を流して手を離さなかった。子猫は電気ストーブであたためられたが、娘のちいさな手のひらの中であっけなく死んでしまった。泣きじゃくる娘をなだめた妻が、庭の植えたばかりの小さなグミの木の下に埋め、小さな墓をつくった。そのグミの木もいまは人の背丈を越える高さになっている。
そのときから、娘は家で猫は飼えないものと思っていたようだ。
だが、子供のころのかすかな哀惜の念は残っている。
どうやら、娘は父親の私に反抗しようとしているらしい。だが、私は警戒心の強い猫が娘になつかないのを知っていた。
警戒心が極端に強いと根性が悪く見える。その根性の悪さをさらに促し、恐怖心を高めようと私は猫とにらみあいをしていた。そっぽを向いて、まったく関心のない素振りで近づき、いきなり「わっ！」と跳び上がる。猫は背筋を立て跳んで逃げる。
猫は家に居つく。そうなっては困るので、この家には嫌な奴がいるぞと教えていた。
わっと跳び上がって猫を脅している偏屈爺がいるのを、この町内で知っている者はいない。
それが、物陰にひそんだ感じで何となく嬉しい。
私の父は、人前では可愛いと、わざと頭をなでる癖に、人のいないところでは暴力をふるう、そういう二面性のある人間だったが、血を受けついでいる私も似ているところがあるらしい。
「覗くんでない。子猫、腹すかせてかわいそうよ」
尻をこっちに向けていつまでも外を見ている娘に、妻が声をかけた。
この何気ない一言が、私を心細くさせた。
覗き見している間は警戒心の強い猫が近づかないのを知っているのだ。こういう洞察力を何というのか、気配りの原形とでもいうのか、それは私にも、娘にもないものだった。
……妻は、いま呉服店で働いていた。いい販売成績を上げている。私が定年退職すると、ぼやぼやしていられませんと働きに出て行った。呉服店というところは、若い女の子がうかつに入っていくと、四、五人で取り巻き混乱させて無理強いに売ってしまうところがあるらしい。妻はそんなことはしない。何となくゆったり話しているうち、お客の方が安心して、何となくが、問題の核心なのだ。
この、何となくが、いつの間にか骨抜きにされ、飼い慣らされて、気がついたら無事に定年退職を迎えていた。何となくこの辺が、忘れ物をしてきたように変なのである。変ではあるがどう飼い慣らされてきたのかわからないから困る。
何となく私は、妻が、脅(おど)している私を通り越して猫を飼いならしてしまうような気がして心配になってきた。
「おい、猫は絶対に飼わないからな。のら猫を家にいれてみろってんだ。糞小便たれ流す。夜中にじゃれてカーテンにぶら下がる。戸棚や箪笥の上にあがって物を落とす。あん畜生、屋根に立てかけておいた梯子をのぼった」
「わかっています。でもね、子猫濡れて、かわいそうでし

ょう」

確定していないことには議論をしないという妻の口ぶりだった。

敵の魂胆読めた。問題の解決を先にのばそうというのだ。いざそのときになったら、向こうには娘がいる、二人に一人ではかないっこない。

私はお茶をすすり、新聞を広げた。

妻と娘はソファーに並んですわりテレビを観ている。

私は新聞を読みながら、窓の外に降りこめている雨のことを考えた。

雨はやむ気配もみせず、びしょびしょと陰気に降っていた。

猫を閉じ込めている雨が何となく不安だった。薄いカーテン越しにそっと覗いてみた。

案の定、三匹の猫が雨をさけて物置の中に入っていた。

ひげの生えた三つの顔が私を見た。

ただではすまされない、私の領分を犯して、いい気味だという顔をしているように見えた。

3

「ああ、猫は……」

気ぜわしそうに妻が夕闇を背に仕事から帰ってきた。

「疲れたか」

明るい灯火の下、娘はコンパで遅くなると帰って来てなく、私は一人で夕食をとって部屋の中はがらんとしていた。

「何も……」

妻は着がえもせず猫の餌の缶詰を開けて出ていった。私は味噌汁をあたため食事の用意をした。

表で妻が悲鳴をあげた。

「痛いったら、もう」悲鳴はすぐ猫を叱りつける声に変わった。

飛んで行くと、表戸を開けた暗がりの中で妻が上気した顔で立っていた。

「噛まれた」

「どいつにだ」

単純な私は面白くない。報復としてごつんと一発叩きたくなる。こういうのを大義名分という。

妻は勢いこんでいる私の背を押して居間に入った。

「黒い子猫ったら、缶詰から皿に餌を移していると、いきなり横から飛び出してきてがぶっと指先を噛んだ。そして、早くあっちへ行けと小さな爪の手で、こうやって払うんだから。かわいそうに、あんたが餌をやらないからこんなことになる。前後の見境もなくなるほど腹をすかせて、うにうにと文句をいいながら、食べている。あんたと居るとみな育ちが悪くなる」

どうも、方向が違う。

私は暗がりに溶けて、妻を見つめている性悪なカラス猫のことを考えていたのだ。

闇の中に溶けている猫は、人間の感覚の外側にいる。朝からなにも食べていないと、子猫にとってはこたえる。待ち切れなくなって感覚の外側の闇の世界から妻の現実の前に、本性をむきだしにして飛び出してきた。

腹をすかせている猫のことを考えると、悪い気持ちはしなかったが、妻は確実に猫を飼い慣らしはじめているのがよくわかった。もっと脅かして居つかないようにしなければと、油断がならない気がしてきた。

窓から外を見てみた。屋外灯に淡く照らされている物置は黒く光っていた。その前で二匹の子猫が皿に頭を突っ込んでいた。親猫が前ずさりになって腰を浮かせ後ろから覗き込んでいる。

妙な光景だった。弱肉強食の世界にそぐわない。親猫も腹をすかせているはずなのに、なぜ一緒に食べないのか。

暗い大地に溶けたような三匹の猫。その上を隣の家のライトに照らされたグミの梢が風に揺れ、かすかな影を落として行き来している。

地の果てのシルエット……明るい室内にいるのに、街を覆う月影は遠い遠い見知らぬ世界のように見えた。

田舎の暗い夜を思い出した。

闇に閉ざされた台所の片隅で真四角に座って食事をしている十二才の少年。両親は離婚し、三人の兄弟は別れ別れになってしまった。遠い親戚である祖父の従兄弟の家に、農夫として行かされた私。

月影に揺れる木の葉を眺めていると、私の脳裏に遠い過去の世界が浮かんできた。

親戚の家の布団はあたたかかった。

布団に入って納屋の暗い天井を眺めていると、涙が流れてきた。大人になったら妹と弟を呼んで一緒に暮らすといつも考えていた。それもすぐ夢の中に溶けていってしまう。夜に抱かれて眠った。暗い夜だけは私のものだった。朝がきて目を覚ますまで、優しい暗闇の中でうずくまって眠ることができた。

何故こうなったのか……。

退職後、私はその理由を、少年のときの残された記憶を辿って、両親の後をたずね続けていた。子を捨てた親の心象世界をさぐっていた。

父は旧帝大の工学科を卒業したインテリで、詩や俳句を書き、田舎の発電所の所長をしていた。頭がよく、他人の面倒をこまめにみる男だった。しかし、夜になると夫婦喧嘩をはじめる。毎晩毎晩はてしなくそれは続いた。地の果

てで発狂したような争いだった。刀を振り回して、「おまえも死ね。おれも死ぬ」と、雪の中に素足で飛び出していく。どんな嵐の夜でも、あれよりはましだ。子供の前で、あそこまで丸だしになれる人間はそういない。

そういう状態になるのを、母は面白がって、かえって触発するような素振りをしては父を怒らせていた。そんな気が、今になってする。

一晩中飽きもせず、「お前の家系は頭が悪い」、「何さ安月給取りの分際で……ろくに食わせていなかったくせに」と、お互いの生家の悪口を罵りあい、とっ組み合っていた。

殴る音、物が砕け散る音、引きずる音。母が殺されはしないか、と三人の兄弟は薄い布団の中でだんごになって震えていた。憎しみの極点で息もつまった父の罵声。母が血煙をあげて倒れるようなすさまじい声を上げる。喉の奥から声にならない声で呻く。血が凍る思いだった。

妹はいつも私の横で泣いていた。

別れるにしても、ただでは気がすまない。相手に深い打撃を与えてからでなければ別れられない。人間こうまで憎み合えるものかと思えるほど、生傷のたえない激しい喧嘩を繰り返した後、両親は離婚した。

それっきり。それっきり父も母も私たち兄弟の前から姿を消してしまった。

子供を育てることなど、さらかまわず、後ろを振り返りもせず去っていった父と母。

考えてみると、二十四歳で発電所の所長となり、九年間も中央からはずされ、カラスも鳴かない田舎に島流しにされていると思っていたキャリア組の、父の無念さや憤りがわからないわけでもないが……父は地位欲、名誉欲が人並みはずれて強く、いつも干されていると嘆いていた。特に人事異動の春になると、今年も駄目だったかと、苛立つ。自分と同期の者に先を越され、胸をかきむしって口惜しがり、家族の者にあたった。

母はそういう父を「稼ぎのすくない甲斐性なし」と、上から冷ややかに見ていた。

どうも父は母にうとまれ、性的飢餓状態に置かれていたのではないかと、大人になってから思うようになった。

夜は果てしなく暗い田舎。都会のように欲求不満を紛らわせてくれるところはない。その暗い夜よりも暗い憎しみのなかで、お互いに傷つけ合い罵り合い、どうやったら相手を不幸にすることができるかと、不毛の業火を燃やしていた。その破壊に満ちた激情は夜が白むまでめらめらと燃え続けた。

両親は感情が先行する子供じみたところがあった。大人ならどこかで妥協点を見いだせるはずなのに、ただ悔しいの恨みだけが先にたち、互いに消耗させてしまった。子供を育てなければならないことも忘れてしまった。

猫でさえ先に餌を与えるというのに。子供を捨てて行って、一度でも思い出したことがあったのか。

今、腹をすかせて前ずさりになっている親猫を見ていると、私は何となく身につまされてきた。不倶戴天の仇ではあるが、物置ぐらい貸してやってもいいような気が、しぶしぶながらしてきた。

指に小さな絆創膏をはった妻が、テレビを観ながらしゃぶしゃぶと夕食を摂っている。明るい螢光灯の下、七つ年の違う妻の顔はしわ一つなく光っている。勤めに出るようになってから、すっかり若返り四十歳半ばにしか見えない。毎朝はりきって腰を振って家を出て行く。娘が、妻の買ってきた派手な洋服を「母さんだけずるい」とはがしにかかることがあったが、そんな妻を何となく恐ろしいものを見るような目で眺めた。いつの間にか妻の思い通りになっていた自分自身のことを考えると、猫に軒下をかして母家をとられてしまいそうな、そんな分裂気味の思考が新たに頭をもたげて来た。

妻の不満はわかっていた。だが、私は働きたくなかった。

「ねえ、あんた。いい腕をもっているんでしょう」

食事を終えたあと、ソファーに腰をおろしてふたりで向き合ってお茶を飲んでいると、妻がぽつりと呟いた。娘がいないのを幸いに説教しようとしているらしい。

「毎日、ぼーっとしていて、仕事口はいくらでもあるんでしょ」

「今のままでいい」

私は建築関係の学校で、週三回、建築士の受験ゼミを担当していた。それで自分の小遣いとおかず代ぐらいはかせいでいた。妻のいうように確かに仕事はいくらでもあったが、もう勤めに出たくなかった。

定年退職してほっと腰を落としたら、立ち上がることが出来なくなった。

生まれて初めて自分の時間をもった。自分の時間をもつということが、こんなに楽しいこととは知らなかった。しみじみ乞食三日やったらやめられないというのが実感としてわかる豊かさだった。土管の中で月を眺めてもいい心境だった。

「それは、父さんの言い分もわかる。困らないだけの年金はおりている。退職金も手つかず残っている。家のローンもない。働いてくださいと言っているわけではないの。このまま家事をさせていたら父さんぼーっとなって、人間老いこんで駄目になってしまう気がする。昔の父さんはこうではなかった」

どうやら妻には、私が茫々たる老いの闇へ転がり落ちていくように見えるらしい。

確かに、そういう一面がないわけではなかった。季節感

があまりはっきりしなくなっていた。毎年、庭にトマトやキュウリ、ナスビを植えてきていたが、今年も植えて娘や妻に食べさせると思っているうち忘れて、気がついたら、イチゴが赤く熟れ、グミが色づいて夏になっていた。その間なにをしていたのかぼーっとしていて思い出せない。

最近、何かと、猫やカラスのことばかり気にかかる。毎年、カラスにグミの梢のほうを盗られていたが、今年こそはそうさせまいと意地汚い顔をして待っていた。カラスは理解出来ないことがおきると、恐れて近づかなくなる。長い紙筒の中からカーテン越しに人の姿を見せないで、パチンコを撃ちこんでやろうと思っていた。私は子供のころ猫撃ちのパチンコの名人だった。

いい年の男が、生活とは無関係な、こういう子供じみた考えをすること自体、もうろくの坂道だと思うのだが、やはり働きたくなかった。

「おまえが生んだ、サエ子が悪い」

私は、働きたくない理由を、娘のせいにした。娘は小さなときから小説が好きだった。本を読んでは、面白かったと、父親の私の前にぺたりとすわってよく話した。大学院にいくようになったいまでもこの習慣は続いていた。親と子は情緒が重なり合う部分があるので、いつの間にか私も小説に引きずられていた。

それまでの私は、文学などというものは怠け者のすることだと思っていた。すくなくとも、建設業界で文学小説をこわきにかかえている者は、うら成りにきまっていた。そう信じていた私が、小説らしきものを書き始めていたのだ。退職後、文章のとりこになってしまった私。人の倍もある太い指で目をこらしてワープロに向かっている自分の姿を考えると、馬鹿ではないかと思うのだが、やめられない。

私は自分の子供のころのことや、両親のこと、人間の真実な姿を書いてみたかった。

親に捨てられた子供はぐれる。世間はそう思っているらしい。実際は、ぐれる暇なんかない。その日から食わなければならない。それが性格化されてしまう。真っ直に目をむいて後ろを振り返らずやってきた。十二歳から働き詰め、野良仕事に精を出し、冬は造材場で働いた。そして、都会に出て大工になった。

あまり若いときから働くと、背がのびない。骨が太くなり、筋肉は盛り上がって横に広がる。手のひらも人の倍ぐらいになった。煙草も酒ものまず、遊びも知らず、ただひたすら夜明けの山頂を求めて歩き続けて来た。

いま抜けてきた暗い林の中を振り返ってみると、暗闇の中から自分たち兄弟を捨てて行った両親の姿がまぶたに浮かんでくる。

何故こうなったのか、本当の親の心を覗いてみたいのだ。

父が死んで十五年になる。新聞の死亡欄で知った。もちろん私は葬式に行く心根はなかった。電話で連絡をよこした妹も同じ意見だった。末の弟だけが父の顔を忘れたという。あの男の顔ぐらい覚えていてもいいと言った。三人は待ち合わせて父の葬式に出向いた。人目につかないように、伏し目がちにおずおずと、肩身の狭い思いで通夜の席のいちばん後ろに座った。

父の遺影が菊の花に飾られ祭壇の真ん中にあった。

狂ったような家庭内暴力をいつも起こしていた父が、慈愛に満ちた、善人面をしていた。

虚構に富んだ顔だった。死の写真まで嘘だった。それは実の子だけにわかる、地位欲名誉欲を満足させた顔だった。

自分だけはトカゲが尻尾を切って生きのびていくように、出世という虚構の階段を上っていったのだ。

私は父の消息だけは知っていた。「北海道の電力と将来の展望」などという論文を新聞に載せていたし、また学芸欄の詩の選者にもなっていた。会社では、父は相当な地位にのぼり、詩人としても、名を馳せていた。

再婚した父には子がなかった。男児と女児をもらい子にして育てたと、葬儀委員長が、高潔な、人間の哀しみを知る人だったと話した。

それはそうに決まっていた。私が子供のころ父は長く性病を患っていた。長く性病にかかっていると子種がなくなる。特効薬のなかった昔は性病は恐ろしい病気だった。母がうつされたと騒いでいた。私には子供などつくれなくなっているのがよくわかった。

しかし、うるんだ目で、葬式の最前列にいるもらいっ子らしい人たちは、私の目には光って見えた。暴力をふるわれることもなく大切にされ、育ててくれたことを感謝しているにちがいなかった。そして、葬式の最後列にいる実の子は白目をむいて恨んでいた。

自分の本当の子供を育てるのはあたりまえのことで、誰も誉めない。他人の子供を育てるから立派な人という。

詩を書き、他人の注目をあびたい自己顕示欲の強い父は、自己犠牲の求道者のような顔をしていたにちがいない。

他人にこんな話をしても決して理解してもらえない。自分の子を可愛く思わない親はいないという。だが私たち兄弟はこういうこともあるのを実感として知っていた。昔のわが家は、外向きの顔が最優先され、内の子供に至っては最下位の存在だった。両親にとって子供は単なる情緒的な付属物に過ぎなかった。

教育論エミールを書いた思想家のルソーは、自分の子供を全員孤児院の前に捨てた。

子供の自由と尊重を訴えて教育論を書いた思想家のルソーと、子供を捨てた現実のルソー本人との間には、どんな隔たりがあったのか。

父もそういう面を確かにもっていた。
私の手元に葬式のときもらった父の詩集が一冊ある。天使のように甘く清らかで、人のこころを温かく包み込む詩だ。子供について書いた愛に満ちた部分もある。もちろん私たち実の子のことではない。他人の子であるからこそ、虚構を膨らませて書けたのだ。
血のつながりのない、他人の子であるからこそ愛せたのだ。
他人の子であるからこそ人も感心した。
父は他人に対しては必要以上に頭が低かったが、理解に苦しむことには、自分の家族の人格をいっさい認めなかった。精神を患っている人のように粗暴で、屁をひりながら拳を振り上げる。どうやったら最大の打撃を与えることができるか、自尊心を踏み潰すことに専念する性癖があったのは事実だった。
……何かをなつかしむように、いつまでも父の写真を見つめていた弟の横顔が、いまでも目に浮かぶ。
食っていかなければと思い続けて来た私。その価値観によって抑圧されていた無意識の世界とでもいうべき暗闇が、無価値なものとして捨ててきたものが、心の底からぎらりと輝いて、実在感をともなって浮かび上がってくる心地が、その時したのだった。

どうやら、これが私の創作意欲の根源らしい。
父の死を境に、心の中に、暗い過去の夜を旅してみたい心情が醸成されていたのだ。
それを小説好きな娘のせいにしている。
こんな心情は、心の健康な妻に言っても理解してもらえない。自分自身でも馬鹿みたいなことと思っている面もあるので、なおさら言えない。
「このままもうろくして、老いていったら駄目なのか。今年は、グミの実をカラスにとらせない、それだけでいい」
「すぐそれだもの。そんなこと言わなくてもいいでしょ。無理に働けといっているわけではないの。それ以上に、長く働いてもらってとても感謝しています」
それっきり妻は黙った。
私も黙った。
黙った私の頭の中に、子供のころの夜空に交錯する発電所のうなる高圧線が浮かんでいた。小さな村の山の端には月が光っている。層の厚い茫々たる薄闇が広がっている。その光景を書こうと、私は妻の顔を猫がものを盗む目つきで眺め、そっと二階に上がった。

4

私の妨害にもかかわらず、妻はとうとう猫を飼い慣らし

てしまった。
夕方になると猫は車の下に隠れていて、妻が帰って来るとまつわりつく。背をなでたり抱き上げても逃げない。子猫にいたっては歩く足の甲に乗っかる。「こらこら、ストッキングが破れる」と悲鳴をあげるが、妻は怒っているわけではない。どういうものか、妻だけになつき、娘には手を触れさせない。父さんに似て性格が悪いと猫好きな娘はひがんでいた。
そんなある日の午後、三人の中学生が訪ねて来て、黒い子猫をくれと言った。
「おお、カラス猫か、持って行け。みな連れて行ってくれ。ずる賢くてつかまらない。土管の中を通って隣の敷地に逃げて行く。網か何かを持ってきたほうがいい」
気がよさそうな、輪郭のぼやっとした猫好きな少年の顔を、私は心許なく眺めた。私の薫陶をうけた猫は少年たちの手に余る気がした。少年たちがきかない顔をしていたら、「一匹千円でどうだ。遠くへ捨ててきてくれ」と、男と男の取引ということになるのだが、そんな男の取引には耐えられそうもない顔をした少年たちだった。
散らかっている二階の部屋でワープロを打ちながら、私は庭から聞こえてくる少年たちの声を耳にしていたが、静かになった。捕まったかと上から覗くと、ベランダの物干しの陰で三匹の猫が太平楽に日向ぼっこをしている、情けない姿が映った。
一時間ほどすると、十人ほどの中学生が網を持って押し寄せてきた。数をたのんで、規模と量で勝負に出てきた。女の子も混じっていた。犬の糞を雪玉の中につめて投げる悪ガキみたいな顔をした者もいたので、私は何となく安心した。
そっちへ逃げた。こっちに来た。一匹つかまえたぞ。中学生たちが家の周囲で大捕獲作戦を展開した。土管の中で、進退きわまった猫が、人の手をかいくぐろうと、強行突破をはかっているのがわかった。
落ち着かなくなった私はそわそわ居間へ下りた。チャイムが鳴ったのでドアを開けると、猫どもは、こうなったらどうしようもない網の中に袋づめになっていた。蹴飛ばしてやりたい、いい格好だった。
「おじさん、この猫、離れ離れにしたら、慣れそうもない。三匹一緒に持って行く。ぶちのほうはこの娘がほしいって」
後ろに立っている女の子が頭をさげた。
「わかった、わかった、もう返してくれるなよ」
私はコーラの大瓶を二本さし出した。彼等は口移しに飲んだ……女の子もだ……そして田舎の子が山鳥を捕ったような顔をしてがやがやと帰って行った。
急に広々となった猫のいない庭に私は出た。

イチゴの季節はもう終わっていたが、グミは赤い粒を陽に照らし風にかすかに揺れていた。口ばしが平たく曲がっている緑色の鳩ぐらいの鳥が実をついばんでいる。枝から枝へと跨ぐようにして伝ってあるく変な鳥だ。どこかの家から逃げてきた南の国の鳥らしい。そのせいか今年はカラスは来ていなかった。

じりじり照る陽の下に私は立っていた。綿雲が、果てしなく、虚空の彼方へと流れていく……。

なぜ猫が嫌いなのか。

子供のとき、妹が口に入れようとしていたお菓子を、猫が横から跳ねて取って行ったことがあった。甘い菓子などめったに食べられない時代である。こういうのはくっきりした映像となって心の根に残る。食い物の恨みは末代たたる。それから猫が仇になった。飼っていた子兎をくわえていかれたこともあった。

猫は年を取ると、猫又と言って、尻尾(しっぽ)が二つに別れる。尻尾が二つになると、夜中に化ける。病人のいる家に、袈裟をきた坊さんに化け、夜中に訪ねていって招くのだという。招かれた病人は必ず死ぬ。死人のいる家にはカラスが朝早くきて鳴く。

こんな本を読んだことがあった。少年期のこういう不安に満ちた記憶は一生続くものなのかも知れない。

私は遠い過去の田舎の風景を頭の中に甦らせていた。

……遥かなる空の彼方。右を向いても左を向いても稲穂、ぎざぎざした穂が風に揺れている田んぼの中で、竹の棒をもった少年がひとり立っていた。

カラスの巣から卵や赤びっきの雛を盗ってくるきかない少年。

村中のカラスに顔を覚えられている、頭にぐりぐりが二つある垢で汚れた少年。

いつも竹の棒を持ちパチンコをポケットにいれて、猫とカラスを狙っていた少年。

それが私なのだ。

どうして、あんなにきかなかったのか。

猫とカラスを狙うだけなら大した害もないが。それで人をやるから困る。

同級生を竹の棒で叩いたことがあった。

母親が怒ってその子を父のところへ連れてきた。母親は同級生のズボンを下げた。陽に照らされた白い尻には棒で叩かれた青い跡が二本くっきりついていた。

父は怒った。

自分の子供を見せしめとして、人前でみじめな状態にして、いいところを見せたい父は、私を殴った。私の顔はあおくはれあがり殴られるたびに何度も倒れた。頭の髪をわしづかみにして地面にこすりつけてあやまれという。あやまれますかってんだ……強情をはって私は頭を下げない。自尊心の問題だった。向こうの十倍は私の方がやられている。それに、いつも父は私を叩いていた。叩くのがそんなに悪いのなら父が先にあやまるべきなのだ。

子供の窮状がわからない、心情的にはどうでもなると思っている自分の子が、言うことを聞かないので、ただ飯を食わせていると思っている父の目がすわってきた。

同級生の母親があまりの激しさに泣いて止めた。

そのすきに私は山に逃げた。

茜に燃える山の稜線を眺めながら、畑の人参をかっぱらって腹ごしらえをした。暗くなってから農家の納屋に入って、藁の中で寝た。家には帰りたくなかった。朝になったら山道をどこまでも歩いて行こうと考えた。がそうもならない。妹が困る。小学二年の妹はまだ重くて飯釜を持ち上げられなかった。釜を持ち上げられないと朝飯が炊けない。

小学二年の妹が炊事を受け持っていた。

私は水をくんだり薪を割ったりの外回りの仕事をしていた。

小学校低学年の子が炊事などできるはずがないと、他人に話してもわからない。母は家事をいっさいやらないので、子供がやるしかなかった。

飯だけはよく食った。いつまでも起きないので、私たち子供が朝食をお盆にのせ枕元に運んでいく。母は布団から頭を出し、箸だけ持って口を動かしていた。健康な人間が手も顔も洗わず布団の中で飯を食べるのは、今になって考えると、規律のない病的な汚さみたいなものを感じるのだが、親がそうなら、生まれたときからそこにいる子供にとっては、それが当り前のことになる。

両親は子供のしつけなどまったくできない人間だった。

そんな母でも、口だけは達者で、子供に面倒をみられながら、子供さえいなければといつも自分の運のなさを嘆いていた。欲しくなくてもころころ生まれてきたと言われても、子供は困る。

狭い庭の中、かんかん照りの空の下でぼーっと立っている私の目に、隣の若い奥さんが庭に出てきて二度頭を下げたのが映った。私は、はっと田んぼのぎざぎざの夢から覚めた。

「暑いですね」と、取ってつけたように言って私も二度頭を下げた。小説を書くようになってから、妻にあんたは道で人に声をかけられても、目を宙に浮かせてぼーっとしていることがあるから、注意しなさいね、と言われていた。

「猫をくれと、中学生が騒いですみません」

「あら、そうですの。いま、外から帰ったばかりなので……」

陽の下で、丈の短めなワンピースを着た奥さんの肌は、美しく汗ばんでいた。

「今年は、何も植えなかったんですか」
「はあ……」
私は浮かぬ声を上げた。まさか、もうろくして植えるのを忘れたともいえない。
奥さんはしゃがんで草取りをはじめた。
隣の庭は花が咲き乱れていて、トマトやキュウリが整然と植えられている。こつちの庭は荒れ野原。私もしゃがんで雑草を取りはじめた。雑草を取りながらふと目を上げると、ブドウ棚の下から、奥さんのしゃがんでいる腰だけが見えた。太ももが透けるように白く陽に輝いていた。私はつまらぬことを考えている自分に気づきあわてて後ろ向きになった。
何となく、白い秋大根だけは蒔かなければと思った。
それも忘れてしまいそうな気がして心配になってきた。
心配して、暑い庭の中でぼーっと立っている自分に気づいて、あわてて家の中に逃げ込んだ。
妻が仕事から帰ってきた。私は心楽しく、中学生が猫をつれていったと玄関に飛んで行った。
「どうして、やったの。いじめられるんでない」
妻はとても哀しそうな顔をした。いい気になっていた私は悪いことをしたようにしょぼんとなり、背筋を伸ばして反省した。
「大丈夫だ、いじめるような子供たちではない」
気のいい中学生の顔を思い出しながら、私はむきになって弁解した。娘は大きくなり、亭主はぐうたらになって、愛情をかけるものが少なくなり、どこか淋しいらしい。要は、どういうものか、金魚をバカ大きくし枯れ花を生き返らせてしまうところがあった。
「犬を飼ったらいい。こんな大きいやつをだ」
若いころ、妻が靴をくわえていったと犬ととっ組み合いをしていたのを思い出し、私は両手を広げて言った。もとから妻は猫より犬のほうが好きだった。
「あんな野良、三匹もいたら、どうにもならなくなる」
私は、結婚したてのころ、飼っていた犬が保健所の犬捕りに連れていかれ、泣きながら後を追っていった妻の姿をまぶたの中に思い出していた。
若くて、あの頃の妻は輝いていた。忘れていた花の匂いをかいだような、それはとても懐かしい追憶に感じられた。
猫はもう帰って来ないと考えていた。私に似て性格が悪く、後ろを振り返らず頭が向いた方に歩いていく、人になれない流浪の旅路をいく猫なのだ。
いなくなったものに対して多少の情感はわいてくる。
妻の手を離れた猫は、いままでより、もっと不幸になるような気がした。
いい気味な、そんな不幸な予想は、私を至極くつろいだものにさせた。

5

「父さん、親猫が戻って来ているよ。車の下にいて、呼んでも出てこない」
学校から帰った娘がそう言って、家の中に入ってきた。
「人の気も知らないで、餌ばかり食べて、あんな人見知りする猫いるかしら、母さんにばかりなついて」娘は文句を言った。
中学生に連れていかれてから一週間ぐらいたった日の夕暮れだった。
あん畜生……戻って来ないだろうという幸福な予想を裏切られた私は、目を三角にして外へ出て行った。車の下を覗くと、猫はまいった顔でうずくまっていた。ブルーに薄茶の毛は汚れ、痩せてすこし小さくなったみたいだった。警戒して私を見ているその左右の目の色が違うのが、此の世の果てのように面白くない。小石を拾うふりをすると、背をまるめて隣の花畑の中へすごい勢いで逃げていった。その後ろ姿に、私は両手をぱちんと叩いて鳴らし、ひゃーっと気合いをかけ脅した。
しばらくすると、表で妻の声がした。バカ猫がにゃーにゃーあまえた声を上げた。
猫撫で声を聞くと昔から私は違和感で背筋が立つ。
狼のように牙を剥いて月に向かって吠えたくなる。
「よしよし、よく戻ってきたね。ここがわからなくなって探したんでしょう。死ぬ思いで育てた子っコを盗られて、かわいそうに、子っコと離れられなくて、子っコのいる家の周りを何日も鳴いて呼んで回っていたんでしょう」
窓から覗くと、方向音痴の妻が、長いまつ毛のつぶら目を細くして、猫に頬ずりしていた。
バカ娘が、人のいい顔をしてそわそわ餌をもって出ていった。
私は面白くなくなって二階に上がった。外はすでに陽が落ち、窓から見える空は藍に満ちて、庭の木も雑草も薄暗さの中に溶けていくところだった。
小学低学年のころ、雛をとった猫の尻尾を持ってぶら下げたことがあった。尻尾を持ってぶら下げるとすごく怒る。体を硬直させ泡を吹いてあばれる。周りに爪をかけようとする。手を伸ばしていると大丈夫だ。口から泡を吹いている猫に、飼い主の爺さんは、天秤棒を持ってそれより怒った。私は逃げた。雛鳥を捕ったからには罰せられなければならない。よくやったと誉められると思っていたので、こんな合わないことはない。爺さん、もうろくして馬鹿になったと、木陰からじーっとうかがった記憶がある。
私の子供のころは、ただきかないばかりではなく、どこか変わっていたらしい。

……暮れなずむ庭を娘が猫を抱いて歩いてきた。すきっ腹に餌をやって、弱みにつけこんで早々と馴らしてしまった。暴れ馬もすきっ腹にして餌をやって馴らす。人情からまると人間ばかりでなく動物も弱いらしい。

私は大きな声で「わっ」と叫んだ。猫は娘の手から跳んで茂みの中に消えた。

「父さんたら……」

娘は街路灯がつくりだしているグミの影の中で怒った。

「猫だけは、絶対に家に入れないからな」

何となく心細く、布団をかついで流浪の旅に出たい心地で私は言った。

妻と娘がついていなければ、パチンコで狙いうちにしていとも簡単に家の周囲から追い払うことができるのだが、妻が無言の圧力となっていてそうもならなかった。猫がいなくなったら、いじめる楽しさがなくなるような、そんな心根もあるにはあった。

猫は間合いをとっていつも警戒していたが、私の脅しにも少しずつ馴れてきた。要するに、私が叫び声をあげても、大したことはないといわんばかりにちょっと振り向くだけで、走り出しもしなくなった。

私の自尊心は傷つく。

猫は蛇を恐れる。青大将を長いひもで縛り、そのひもを猫の首輪に通して引き寄せると、猫は毛を逆立て気持ち悪がる。噛じって跳んで、爪をたてて跳んで、気が狂ったように逃げる。樹の上にかけ登っても蛇は背中のあたりでにょろにょろ動いている。木に爪を立ててしがみついている恐怖の面。どうやったら猫に打撃を与えることが出来るか、子供のころやったことを思い出す。

そんなある日の午後、私は外で車を洗っていた。猫はホースからほとばしる水のとどかない距離を知っていて、向こうの屏の上でのんびり日向ぼっこをしている。空は青く、隣の家の庭ではトマトが真っ赤に熟している。こっちの庭ではコオロギが鳴いている。

「タマ、お前ここにいたのかね……あの、すいません」

遠慮深い声に振り向くと、品のよい老婦人が、強い陽差しを正面から受けてまぶしそうに立っていた。

「お宅の猫ですか」

婦人は、なつかしそうに品の悪い家の猫を指差した。

「なんも、のら猫です。子ッコ連れてきたのを妻が馴らして、物置に住まわせていたのです」

「黒とぶちの子猫ではありませんか」

「そう、そうです。根性ひん曲がって……」

ここまで言うと、自分の性格の悪さが出そうで、私は黙った。

「やっぱりね……」

婦人は目を細めている。猫好きらしい。

「いえぇね、この猫、飛行場の野原に捨てられていたのですよ。目があいて、毛が生えそろったばかりのほんの小さなときです。五匹の子猫は体を寄せ合って鳴いていたのですが、カラスに襲われて生き残ったのはこれ一匹だけ。警戒心が強くて、私が助けに行っても草むらにもぐって姿を見せない。そして夜になると鳴き声をあげる。かわいそうで、何度も助けにいったものです。その都度いなくなってしまう。虫か何かを食べていたらしく死にそうで死なず。自分の背丈を越える草むらから出ることもなく、隠れ家として大きくなったのです。大きくなって、道路のこちら側に来るようになってから、二カ月も餌づけをしてやっと飼い馴らしました。近くに子供の野球場があるので、追われて、人間には懲り懲りしたところがあったのかも知れません。一冬私たちと過ごしました。子を五匹も産んだのですよ。毛並みがいいので三匹くれてやった日に、残った黒とぶちの子猫を連れぶいと家出して行った。それっきり……賢いというのか、警戒心が強いというのか、人には馴れない猫で……よくまあ馴らしましたね」

ここまで話すと、婦人は日傘を広げ、かげろうに燃えて白ぼく浮いて見える家並みを歩いていった。昼間いつも一人でいて、話相手のほしい私はなんとなく名残惜しく、じりじり照る陽の下で婦人の後ろ姿を見送った。

6

老婦人の話を聞いてから私は家の猫を軽蔑の目で見るようになった。私のそばから離れて、しれっと貴族面して立っているように見えても、生きる重みをずっしり背負った、要するに素姓の知れた大したことのない猫なのだ。

私に似ている猫。

だから憎たらしい。

憎たらしい猫とにらみ合いをしているうち、いつの間にか秋も深まっていた。

ワープロに疲れた頭でぼーっと二階の窓から、向かいの真っ赤なナナカマドを眺めていると、近くの保育園の小さな子供たちが、がやがや歩いて来る声が聞こえてきた。すじ向かいの道路際に寝ていた犬が、あわてて引っ込んでいった。

自分の心の中に閉じこもっていた私は、救われたように外に出て行った。若い保母さんが頭を下げた。庭のイチゴが熟れると、毎年もぎにやって来て、顔見知りだった。

幼児の列が目の前を通っていく。あっちを見たり、こっちを見たり、泣いているもの、叫んでいるもの、統一のない長い色とりどりの列は遅々として進まない。中には後ろ向きに座りこんでしまう子供もいた。いちばん後ろは、四つの椅子がついた乳母車に乗せられた一歳ぐらいの幼児が

泣いていた。

娘が小さかった頃を思い出す。

甘くて、あたたかくて、柔らかい皮膚感覚の長い列は、青空の下ゆっくりと角を曲がっていった。

……家に入りかけた私の目に、ベランダで長々と眠っている猫の姿が映った。両手をばちんと鳴らしわっと叫んで脅した。猫は薄目を開けて私を見つめ、ゆっくり背伸びをすると、庭の茂みの中に入っていった。

冬になったら寒い物置で暮らせない猫のことを考えて、私は悩まされていた。娘と妻が家に入れるというに決まっていた。親子喧嘩になる。ここは一歩退いて、先手を取るしかない。私はひさしぶりに大工道具を取り出すと、汗をかきながら猫小屋をつくった。縦長で入り口より一段高いところに寝る場所をつくった。入り口から入りこむ冷気は、こうすると少しはさえぎられる。

猫小屋を物置の中に据えた。出来映えはまあまあとして、クソ面白くないことこの上ない。

娘が帰って来た。

「毎日、ほかほかカイロ一個入れてやれば寒くない。猫は絶対に家に入れない」と宣言して、猫小屋をつくったことを伝えた。

「缶詰食べてぜいたくな。おれの子供のころは、人間様でも缶詰は食べられなかった。昔は残りの焦げ飯に味噌汁をぶっかけ、タクアンの尻尾を一切れのっけてやったのが猫マンマだった。昔の猫はタクワン食べた、嘘でない……」

私は駄目を押した。

鮭の照り焼きに大根おろし、わかめの酢の物をつくり、風呂を沸かして待っていると妻が帰って来た。

「父さん、猫小屋つくったってさ。ほかほかカイロいれておけば寒くないって……」

娘がたまげたでしょうというように言った。妻は懐中電灯を持って物置へ見にいった。戻って来た妻の顔は、明るい電灯の下で、てかてか光って嬉しそうだった。妻も冬の猫のことを思って悩んでいたような気がした。

その晩、ぼけっとした顔で日向水のような終い風呂に入った。

体を洗うのは面倒なので、カラスの行水よろしくせかせか撫でていると、「石鹸、なかったでしょう」と妻が入ってきた。

「ある、あるってば……」

「あんた、なんで体を洗っているの。洗濯石鹸で洗うなんて、どうしてそんなに汚いの。私に隠れて、昔からこんなことをしていたんでない」

妻はうさんくさげに、まいった顔になった。

「そうでもない、洗濯石鹸のほうが顔石鹸よりよく落ちる。

これで黒光りするほどぴかぴかに磨いて、御用立て申し上げていたんだ。今更、文句あるか。たまに背中を流してくれてもいいべさ」

三十年以上隠し通していたものが見つかるなんて、もうろくしたかと、そんな気がしないでもない。

子供のとき、天秤棒を肩にしてよたよた歩いていると、雄羊に後ろからどん突かれ、糞桶をかぶったことがあった。よくこなれた糞の匂いは顔石鹸では消えない。小川の縁で洗濯石鹸でごしごし洗った。そのとき、ぴかっと感じたのだ。それから今まで洗濯石鹸があるときはそれで洗っていた。だが、いくら夫婦でもそんなことは言えない。

妻は背中をごしごし洗い始めた。亭主の体と稼ぎは自分のものだと思っていた若かったころは、残業から疲れて帰ってくると、よく背中を流してくれた。体も稼ぎも駄目になってしまった今はめったにない。

「着たまま布団に入るし、うっかりしていると丹前を破いて、そこから頭だけぬぅーと出して寝ている。自分の部屋の中は豚小屋みたいに散らかして、虫が涌いてくる。本当に、あんたは育ちが悪い」

妻は文句を言っている。いつからか、私たち夫婦は寝室を別にしていた。私は自分の部屋を、女人禁制の場所として精神的なバリケードを築いていた。男一匹テレビのない本当にくつろげる場所にしていた。退職して、小説らしきものを書くようになってから、精神的な余裕がなくなってきて、近年とくにだらしなくなっていたのは事実だった。年を取ると昔に帰るというが、育ちの悪さがより出てきたらしい。

育ちの悪さはどうつくろっても、他人にはわかる。他人にわかるぐらいだから、妻はよくよく身にしみて知っていた。知ってはいたが、雑巾と手拭いの区別のない、本当の育ちの悪さとはどういうものか、三十年連れ添った妻でさえ、想像の圏外にあってわかっていない。私自身の心の隅にも、恥みたいなものがあって話せないばかりではなく、遠い過去の生活が嘘みたいに思えることがあって、現実と回想の世界が危うくなっているような、不安な気持ちになってなお話せなくなる。

だが本当なのだ。

子供のことなど眼中になかった母。

母性を欠いた女がいるというが、いやそれ以前の、自分の身の回りのことをするだけで精一杯で、子供を育てる精神的負担には耐えられない人だった。全体的にものを見ることが出来ず、いつも目先のことに追われていた。土台を忘れて家を建てるような、途方もない混乱をともなった人だった。自分では何も出来ないので依頼心が強く、いつも子供に頼っていた。頼っているくせに気位が高く、将来子

供の世話にはならないと積極的に命令しこき使っていた。

熊が出たこともある田舎道、山二つ越えたところにしかない隣村の店へ、よく買い物に行かされた。買い物から帰ってくると、もう一度行って来いという。

計画的にものを考えることができないので、思いついたものだけ頼み、肝心なことは忘れているから困る。

こんなとき文句を言おうものなら、父に頭が悪いと言われ劣等感に苦しんでいる母は、すごく怒る。言い出せるものではない。

買い物はいつも付けだった。借りがごまんとあり、店のほうはいい顔をしない。子供のころの私はお金など見たことがなかった。

店でキャラメルをポケットに入れたことがあった。店の人が掛けを取りに来たとき、帳面にキャラメル三個とずるく書かれているのが母に見つかり、自分だけ得をして、小作人の子供みたいな下劣なことをするなと叱られた。自分だけ食べたわけではない、十粒のキャラメルを私は四粒、妹と弟は三粒ずつ、裏の便所の茂みの中で分けて食べたのだ。

どういうものか店に行くと、自制心がなくなり無性に盗りたくなる。こういうことが何度もあり、店に行くのは気重なことの一つであったのだが、二度も続けて行かされるのには心底こたえた。

弟を連れて雪が降り始めた山へ、しなびたブドウを採りに行ったことがあった。弟が蒼い顔になって寒さに震えて動かなくなった。気がつくと、弟は短いズボンにヘソの見える半袖の、真夏の格好をしていた。おぶって帰って母に言うと、まだ死ぬもんでないと怒られた。

「ちょっと腹をへらすと、すぐびいびい泣いて」

よちよち歩きの弟を叱っていた母を思うと、何かが足りない気がしてくる。

夜尿症だった私が寝せられていた布団は、薄い座布団を二つ合わせたぐらいの広さだった。足を伸ばすと、膝から下が外に出る。北海道のそれも内陸の気候はしばれる。ダイヤモンド・ダストといって零下二十度以下になると空気中の水分が凍って、きらきら輝くようになる。はく息が布団の端に凍りつく。今と違って建てつけの悪い官舎の一重の窓、隙間から粉雪が吹き込んでくる。夜中、父と母のぎゃあぎゃあ罵りあう声を聞きながら、薄い布団にちぢこまって寝ていた。一晩中体はあたたまらなかった。

子供は親を代えることはできない。

逃げ出す場所もない。

生まれたときからそうなら、そういうものだと思ってしまう。

それに買物依存症の母はいつも借金で困っていた。寒いなどと、出費をともなうことは言い出せない雰囲気をもっ

ていた。

ここから下のない貧乏な生活。いつも借金で首がまわらなかったが、家そのものが貧しかったわけではない。父は当時としては高給取りだった。普通のサラリーマンが月給五十円ぐらいのとき、百五十円以上もらっていた。田と畑を所有していた。それを人に貸していて、秋になると物置に一年食べられるぐらいの米俵が、年貢として積まれた。大きな木が植えられている百町歩を越える山林も所有していた。

小学四年までは家にお手伝いさんがいた。母の生家が大金持ちでそこから送られてきていた。

昔は早婚で、母はお手伝いさんつきで父と十六歳で結婚した。女中を嫁入り道具の一つとして持って来た、と母は身分の違いをいつも誇示していた。

山林、田畑は母の父が買ったものである。人の鶏小屋から卵を盗んでこなければならないほど貧乏に思えたのは、母の浪費癖と無計画な衝動買い、家事にたいする無関心が原因だった。

母は我がままな女であった。

気位が高く……果てしなく広がる田んぼの中、頭のよい同級生が、地主である自分の家の泥田に這って草取りをしている畦道を、女中に物を持たせて従え、洋傘くるくる回しながら、もっと働け、と目で抑えて通ったと自慢していた……そういう理解に苦しむところがある人だった。

父は近在になりひびいた秀才だったらしい。安月給取りの子である父を、母の父親が拾って大学へ上げた。父は大学一年のとき母と結婚している。

要するに、エリートと大金持ちの娘とが結ばれたのだ。昔は大学出はいなかった。大学を出て官庁に勤めると、三、四年で小さな町の官選町長になれた時代だった。

その母の生家が事業に失敗して、無一文になった。

それから、何もかも駄目になってしまった。

母も我がままだったが、父も相当な根性曲がりだった。父は金持ちの一人息子である母の兄によく豪遊させてもらっていたらしいが、その一人息子が金山に手を出して無一文となり、背をまるめて父を訪ねて来たとき飯さえ食わせなかった。伯父は玄関の雑巾で顔を拭い、その雑巾を投げつけて出ていった。

得意そうに鼻の孔を広げ、背筋を伸ばし、馬鹿にしたように、嬉しそうに、あざけりの微笑を浮かべて眺めていた父の姿が、今でも目に残っている。父は他人にはそういう態度は見せなかったが、身内の者には酷だった。どうしようもなくなって救いを求めると、猫が半殺しにしたネズミを弄ぶように、追い鞭をかけるようなところが確かにあった。

自分より頭の悪い者が、自分よりいい暮らしをしている

と、いつも悔しがっていたのだ。

社会にうまく適応するため勉強をしてきた父には、社会にうまく適応できない人間を軽蔑するところがあった。

こんな感情が、地位とか名誉を果てしなく求める、地位が思うように上がらないと、不安にさいなまれる性格をつくりだしていたのかも知れない。母の父が死ぬと、すぐ家を破産させてしまった伯父は、父にとっては、もうどうでもいい人間であったにちがいない。

身内の者を守ろうとしない、近親のものに肌のあたたかさを感じない、性格の悪かった父。

父には七人の兄弟がいた。父の兄と父だけは本当の兄弟で、あとの五人は母親が違っていた。父は継母に育てられた。本当の母親は父が二歳のとき死んだという。そのあと嫁いできた継母が五人の子を産んだ。こういう家族構成が身内の者に肌のあたたかさを求めない、家庭より外がいいという心の影をつくり出していたのかも知れない。事実、父は渡る世間に鬼はいないとよく言っていたが、繁雑な係累である子供を捨て、鬼のいない世間に住みたかったのではないかと思う。

父の父親はすごいかんしゃくもちで、意にそわないことがあると、すぐ感情的になって完膚なきまでやりこめる人だったという。家をげんこつで支配した男。吝嗇（りんしょく）で我がままで、自分だけは二の膳つきで白米を食べていた。子供は稗（ひえ）飯に汁と漬物だけときまっていた。昔はこういう家長がいたらしいが、晩酌をしながら、子供が食べるのをじろりと視ていて、そのぐらいで止めておけと、声をかけたという。

父はげんこつで殴られてきた。ひもじくても、悲しいことがあっても、子育てに忙しい継母は助けてくれない。自分の父を憎み、継母を恨んで、白目をむいて生きてきたにちがいなかった。

落とし穴を掘って、人が落ちるのを待つような妙に歪んだ心の世界をもっていた。溺れる人に手を差しのべながら、掴ませない一面は確かにある、人の不幸を喜ぶ男だった。

泥棒癖のあった私。

「よくも面子を潰してくれたな。村の人に合わせる顔がない。おまえなど死んだほうがいい」

そう言って、一晩中せっかんする父と母。

どういうものか、私をせっかんするときだけは、父と母は仲がよくなった。

卵でも盗ってこなければ食べる物がなくなっているのが、炊事をまかせっきりでわからなかった母。味噌ない、醤油ない、火をつけるマッチまでないと、よく予想外のことがおきた。母は、なくなるのを初めから予測しないのが悪いという屁理屈を、いつも言っていた。自分だけは何もしないで一段高いところにいて、子供につくされなければ気が

休まらない人だった。

面子面子といつもうるさかった。そのくせ、寝小便たれの私の面子は考えたことがない。小便たれたまま学校の石炭ストーブにあたるとゆげがたって臭く、恥ずかしかった。そんなとき、あたためられた米粒ぐらいの大きなシラミが這い出してくる。そのころの田舎の子供にはシラミがたかっていただろう。しかし私だけは特別だった。肌着の内側にびっしりはりついていた。母の言う小作人の子より悪かった。

小学五年のとき、これを言って馬鹿にした、六年生の体の大きな相撲の選手と大喧嘩をしたことがあった。何度も投げ飛ばされたが相手の顔に爪を立ててしがみつき、肩に歯をぎりぎりさせて食いついた。相手も私の腕を噛んだ。こうなったら死んでも離さない……ふたりはそのまましばらくじーっとしていた。どのくらいたったかわからない。六年生が、突然「おーん」と牛のような声をあげて泣き出した。

どうして、歯までぎりぎりさせたのか……。

そんな両親のもとにいると子供心にも、自分が病気になったときのことを想像して心もとなくなる。飯も食わされないと考えるようになってくる。

……妻が汚い男と言いながら私の頭まで洗いはじめた。

赤子のように私は黙っていた。黙って洗ってもらいながら、もうすぐ来る寒い冬に思いをはせていた。

ごうごうと夜をきしませている吹雪に閉ざされ、薄い布団の中でちぢこまっている子供のころの、自分の姿がまぶたの中に濃く甦っていた。

「なー、母さんよ。おれがこのままもうろくしたら、飯だけは食うしと言って、物置の中に入れとくんでないか。そして、まだ生きていると覗いているうちに忘れて、気がついたら小便と糞垂れ流しにして、尻を凍りつかせたまま死んでいた……ということになるんでないか」

私は、奇想天外なことを考えた自分がおかしくなった。

しかし、昔の我が家では、あっても不思議なことではなかった。

「かも、知れない……」

妻は腹を抱えて笑った。飯だけは食うし、という言葉がおかしかったらしい。しかし、私の人生は、間違いなくこの飯だけのために生きてきたのだ。

「物が余っているのに、どこからその最低限度の飯という発想が出てくるの。父さん、小説が書けないからといって、眉間にしわを寄せて、あんまり深刻になるんでない。風呂からあがってビール一杯やったら」

「おまえも、一杯ぐらいつき合ってくれよ」

私は楽しくなった。

結婚したころの妻は、ビール二本ぐらいならけろりと空けた。そのころの私はビール半杯で金時の火事見舞になった。いま妻はアルコールは口にしない。その代わり私が少しは飲めるようになっていた。

バスルームの中はあたたかく湿っていて、光が拡散した感じで明るかった。体を流してもらいながら、むかし二人で一緒に風呂に入り体を洗い合ったのを思い出した。凝り性の妻の肩を、背中までよく揉んでやった。そして、湯上がりのほてった体を裸に近い格好のまま、冷たいビールを二人で飲んだ。

原始的で即物的な体の匂いを発散させながら、酔った妻がとろけて、ものうげに、長いまつ毛をゆっくり閉じたり開いたりしながら私を見ていた。

過ぎ去ったそんな若かったころの妻を、私はなつかしく心の中に浮かべた。

……体を洗ってもらってせいせいして居間にいくと、ずるそうな顔をして猫がいた。真冬にカイロを取り上げてやると、二重人格者の顔をして私はにんまり頬笑んだ。

7

音もなく降る雪の中で、猫が寒さに震えて鳴いている。テレビを観ている妻がゆっくり頭をめぐらせ、訴えるような視線をそそいできた。

私は、新聞紙をまるめて暗い外へ出た。

弱肉強食の世界、世の中にこんなにのら猫がいるとは想像もつかなかった。私がつくったカイロをいれた小屋を、ほかの猫が来て横取りする。その度に家の猫が鳴き声をあげる。喧嘩に弱いバカ猫が無性に情けない。いつだったか、喧嘩に負けてふっ飛んで逃げてきたことがあった。足がもつれて、カーブを曲がり切れずに電柱に横腹ぶつけて走ってきた。喧嘩に負けるだけでも情けないのに、カーブを曲がり切れずにふくれてぶつかる猫がいるか。運動神経が発達していない脳足りんだと私は思っていた。

その脳足りんを守るため寒い屋外に出て行かなければならない。こんな合わない、馬鹿バカしいことはない。

だが私は内心ほくほくしていた。近所ののら猫をぜんぶ集めて戦っていた積年の恨みを一挙にはらす好機到来、こんな面白いことはない。小屋を占領しているのらを妻が追いだそうとすると、反対に「ふー」と牙をむかれ、妻のほうが逃げてくる。私の場合はそうはいかない。逃げ出す正面に一発きめる。猫は後ろに耳をさげて潰れた顔になる。飛び出す背中にもう一発きめる、心を豊かにさせる小気味よい感触だ。

スチームアイロンをいちばん最初に見たとき、シラミのたかった下着をなぞったら気持ちいいような、シラミがいないのが残念なような、変な感じにとらわれたが、猫の背にはそれに似た感触があった。

猫のほうは、とっかえひきかえやって来る。同じ奴が何度もすきをみて忍び込んでくる。寒い外で一晩ほっつき歩くか、一、二発叩かれてもあたたかいところで寝るか、二者選択を迫られたら、あたたかいほうをとる。

敵のほうも考えてくる。私の足音を聞くと、飛び出して逃げていく。そうはさせじと、私のほうも足音を忍ばせて靴をはきいきなり飛び出していく。三つ子の魂百までも、六十爺が息をつめて目を据えている。馬鹿みたいなことだと思うのだが、やめられない。追っても追っても敵はやってくる。

結局、家の猫は寒いところで野ざらしになっている。それが妻や娘にわからないから、何となくほくそ笑んだ感じで嬉しい。

「のら猫おっぱらった」

まっ白な猫の背中に一発くらわせて、せいせいして居間に入っていくと、妻が尋ねた。

「あぁ、今夜はしばれる。粉雪が降っている」

「夜中、また追い出されないかしら」

「だいじょうぶだ。痛い目にあった奴はもう来ないし、それに二匹で入っていることもある」

私はその二匹で仲良く入っているのも、追い出していたのだった。

8

空は吠え、大地は凍てつき雪が吹き溜まっている。窓がかたかた鳴っている。グミの枝が風にあらがっている。

それを斜め下に見ながら、私はワープロに向かっていた。ふと、足元をばたばた走って行ったものがいた。すぐ、ネズミだとわかった。今朝方、寒さを逃れて壁の中へ入りこんでごそごそやっていた奴である。私はネズミが入る場所を知っていた。その穴を塞いだ。中に入れたまま塞いだので、出口を失ったネズミは私の部屋にもぐり込んできた。

ネズミの足音。なつかしいその足音は、私に妙な感慨と記憶を呼びおこさせた。

子供のころのわが家にはネズミがいっぱいいた。家全体、どことといわずばらまかれたようにいて、板壁に飯粒で張り紙をすると、すぐ隙間の向こうからそれを噛って落としてしまうぐらいいた。食べ物を入れる戸棚はもうあちこち食い破られていた。穴があいているそこに食べ残しをいれ、また取り出して食べていたことを思うと、何となく今になって気持ちが悪い。

ネズミがいると、猫がいない家の中、大きな青大将が入

り込んでくる。押入れの上からネズミをくわえてぶら下がったことがあった。夜中、天井の上を、さわさわと這っていく青大将の音は、心を豊かにさせる。

掃除とかネズミの駆除を心がけないから、こういうことになる。

掃除などどうでもいい、父と母は、心を患っている人のようにただただいがみあっていた。片方が「わっ」と叫ぶと、もう一方も「わっ」と叫ぶ。理由なんかない。憎しみの感情だけが先行する。そして二人は痩せこけた自尊心をかきむしりはじめる。

ネズミと蛇と人間が共存していたのだ。

子供のころ、ネズミ捕りの金網にかかったのを突ついて、指先を噛られたことのある私は、猫よりネズミのほうが嫌いだった。

「おーい、サエ子よ、ネズミが出た。塵取りと殺虫剤を持って猫を連れてこい」

私は階下に声をかけた。娘が猫を抱いてきた。

「角のソファーの下に隠れている。片方を持ち上げて、けしかけろ。ネズミには、家ダニといって小さなノミがいっぱいたかっている。茶色くてぴかぴか光っていてすごく飛ぶんだ。こいつに血を吸われたら、痛がゆくてまいる。殺したらすぐ殺虫剤をふきかけろ」

「父さんがそばにいたら、ウニ子がおっかながってそわついて駄目、下に行って」

娘は家の猫を、幼児の原始的な発声でウニ子と呼んでいた。なぜそんな名を付けたかわからない。

「ウニ子、ネズミを捕らなかったら、物置から追い出す。ありがたがりもしないでただ飯食って……」

私はそう言って居間に下りた。

ややあって娘が興奮に顔を赤くして下りてきた。

「すごい。父さんがいなくなったら、ウニ子すぐ耳をぴんと立て狙うように首を前に伸ばした。わかったみたい。私がソファーを持ち上げると、いきなりがぶっと食いついた。ネズミが死んだのがわかったら、それっきり、興味がなくなったみたいに知らんふり。ネズミの耳に小さな虫がいっぱい並んでついていた」

猫がネズミを捕るのをはじめて見た娘は、「すごいすごい」と感激し、肩で深呼吸を繰り返しながら、何度も頭を横に振っている。

今の都会の子は、猫がネズミを捕ることさえよくわからないらしい。

「ねえ、父さん。家の前の道路にネズミが死んでいたことがあった。それにさ、緑色の変な鳥が庭に落ちていたこともあった。あれウニ子が全部捕ったのかもしれない」

そう言われてみると、確かにそういうことがあった。喧

嘩には弱いが、まだ野生を残しているウニ子を少しは見直す気になった。

「父さん、ウニ子を家の中で飼ってもいいでしょう」

娘がずばりと切り出してきた。

「じょ、冗談でないって」

私は、目をむいた。

「いいんでしょ、私の部屋で飼うんだから」

娘は独断的にそう一人で決めてしまった。しまったと思ったが、どうしようもない。ネズミを捕ってもらったこちら側にも多少の弱みはある。茶の間には絶対入れないという条件であっさり押し切られてしまった。

だが、娘のあとをついてくる猫は、そういう条件を理解していないから困る。

居間の椅子の下にいるウニ子を見つけて、「こらーっ」と私は吠えた。ウニ子は娘の後ろにふっ飛んで逃げた。

「父さん、見て。猫が耳を後ろにぴたりとつけ、頭をたれ、尻尾を低くしているときは、降参しました、敵意はありません。という信号を送っているんだから、そんなに怒らなくてもいい」

娘にそう言われると、もう怒るわけにはいかない。何かがすっぽ抜けていて面白くないが、どうにもならない。

猫はずるい。犬のように開けっ広げでない。

私が、新聞か何かを読んでいると、いつの間にかそばに来て、ストーブのいちばん暖かいところで長々と寝そべっている。そして、正面向いている私に気づくと、危なかったという顔をして椅子の下に逃げていく。そのずるそうな顔といったら……時には、伸ばした私の足がウニ子にあたることもある。そんな時、反射的に爪を立てようとするが、とっさに気づいてあわてて逃げていく。

これは娘の言う、敵意がありませんという顔ではない。肚に一物ある顔だ。

粒の大きいブドウなんか食べていると、落ちて床をころころ転がることがある。目は自然にそれを追っていく。転がるブドウを、猫が前脚でおさえようとする。育ちの悪い私は思わず「ふーっ」と唸る。ウニ子と取り合いをして口に入れた一粒の甘み、その実に毛がついていてじゃりと噛むと、私は残酷な感情にとらわれる。心底情けなくなる。感情まる出しになって、尻尾を縛って洗濯棒につるしたくなる。

そんなウニ子がどう間違えたか、私の足にすりすりと体を寄せて来たことがあった。私は、「ぎゃー」と叫んで跳び上がった。不倶戴天の仇、妹のお菓子をかっぱらった猫に、親愛の情ですり寄られたのだ。

これは精神的な奇襲だった。

娘がふっ飛んで来て、猫を抱いていった。妻が帰ってくると、父さん「ぎゃー」と跳び上がったと、珍しいものを

見たような顔で話した。
居間のいちばん暖かい私の席で、ウニ子が寝ていることがあるらしい。私が下りていくと、叱られるので、娘があわてて抱いてよかす。ああ、危なかったというその顔は、机の下に逃げていく猫そっくりだ。動物は飼い主に似るというが、その反対もあるらしい。
よく妻は私の部屋のドアを細めに開けて文句をいう。女人禁制なので入ってこない。部屋の中のあまりの乱雑さに、精神を患っている者の住み家だと騒ぐ。一つのことに集中すると、これほど周りのことに思いがいたらなくなるものかと、十回に一度は反省して掃除をする。
そうやって、いつものように妻がドアの隙間から文句を言っていると、ウニ子が覗いてこちらをうかがった。妻の足を両手で抱くようにして二本の後ろ脚で立って背伸びして見たのだ。畳にごろんと転がっていた私の目の高さと、同じになる。うさんくさそうに、私が病気で動けなくなったら、足を噛って引っ張るという顔つきだった。私は子供のとき、死にそうになっているお婆さんの足を、腹をへらした飼い猫が噛って、血をピチャピチャなめていたという話を思い出した。これで袈裟でも着ていたら助からない。
私は跳び上がって怒った。猫は逃げていった。
「父さん、ウニ子が部屋の中を覗いたと怒った」
妻と娘の笑う声が居間から聞こえてきた。
猫が人間を噛って血をなめるわけがない。そんなことを考える自分自身を馬鹿みたいだと思うのだが、子供のころの原始感情が先に出て、私の心は穏やかでなくなる。
ネズミ一匹の高かったことよ。しみじみ情けなかったが、どうしようもなかった。

9

以前、私は仕事の合間に本ばかり読んでいたことがあった。小学六年までしか行っていない私は、二十歳ころまでは新聞もろくに読めなかった。大工仕事は肌で覚えていたが、字が読めないと何かと不都合がおきる。そのころ一緒に暮らすようになっていた妹をつかまえて、字の読み方や意味を教えてもらった。小学校の算数の本を買ってきて、分数やパーセントの概念をならった。きつい肉体労働のあとでちょぼちょぼ本を読んでもそう進むものではない。二級建築士の資格をとるのに四年もかかった。本格的に勉強をはじめたのは、妻と結婚して、一年制の職業訓練校の実技の教員をしはじめてからである。一級建築士の資格を取るとなると、サイン、コサインが出てくる。横文字も出る。まずそこから覚えなければならない。目の前が絶壁になった。
あのころは燃えていた。朝日に向かって燃えていたのだ。

現実感があった。ひげを伸ばしっぱなしにするようなことはなかった。
今も私の心は燃えている。しかし、それは明日のない夕日に向かって燃えているのだ。何かを恨んで、溶けながら暗い夜に向かって落ちていく西陽を見つめているのだ。
ひげを伸ばし、ばさばさの頭をした私が、こい藍に彩られていく夕闇の中に立って、遠い影絵を見詰めている。
陽が落ちて本当に暗くなったら、私もその闇の中にぼうぼうと溶けてしまって、もう戻って来ることが出来なくなるのではないか、と不安な気持ちになることもあった。だから、妻が部屋を覗いて、あまりのだらしなさに気が狂っているみたいだという言葉は、私をひやりとさせる。
確かに、父と母は、心を患っている者のように、だらしがなかった。
今、考えると、自己顕示欲の強い、いい振りこきの父と母は、ずるくて、こういう姿を絶対に他人には見せなかった。
内面にぐにゃぐにゃしたものがある者は、反対に他人には善意に満ちた虚構の姿を演出する。何もかも演出なのである。人の前では演出している自分と、そうでない自分との区別がつかなくなる。人の注意を惹きさえすればよい。
隣人にとって、父くらい、誠意に満ち常識的で、付き合いやすい人間はいないのではないかと思う。善意に満ちた行動規範と、家族に刀を振り回す父の本当の姿とのあいだには、どんな谷間があったのか。
暴れたあと、しばらくぼーっとしていて、二重人格者のように、暴れたことさえ、あれほど私を叩いたことさえ、遠く意識の圏外に去っていくみたいだった。
父は、間違いなく、この二重人格者の道を歩いていったのだと思う。そして、善意に満ちた虚構の演出だけが表面に出てきて、人に好かれ地位を得ていった。
子供のころ虐待された原風景をもつ者は、心が偏るので大人になっても人とうまく和していけないというが、エリートとして人より頭一つ上に出ていなければ気がすまない、他人の注目を浴びていなければ不安になる父は、生きるために邪魔になった原風景を捨てた。父は、自分の子を叩かせた、子供のころの憎しみの原風景とはまったく異なる、肌あたたかい人間性を、他人に対して限りなく演出していったのだ。
他所行きの顔……その道を父はずうーっと歩いていった。子供を捨て、後ろを振り返らず、新生の道を、求道者のような顔をして歩いていったにちがいない。
父の父親、私の祖父もこれに一役かった。
本当の孫である妹と弟を、子供のいないアイヌの家に捨てに行った。ていよく始末をつけたのだ。
しいたげられ、生活もよくなかったアイヌの人たちは、そのころまだ子供をもらってでも育てるという、過去の風

習みたいなものを残していた。
そして私は、結核で長期療養をしている主のいない遠い親戚の家に、農夫として行かされた。
それらも、今は遠い過去のものとなってしまっているが、闇は果てしなく濃い。私はその闇の中に立っている……途方にくれて……だが、私はその闇の涯がみたい。両親の、想像もつかない心の中を書いてみたい。
死んだ人の後をつけている、夜の散歩者。闇の中に立つと周りが見えなくなる。季節感さえ薄れ、気がついたら頭はざんばら髪、ひげはぼうぼうと生えている。
だから妻は怒る。
だが、私の心はめらめらと燃えている。
「兄さん、生きて来られたんだから、お互いに長生きしましょうね」
妹は私の耳許でよくささやく。これは他人には何でもない会話のように聞こえるかも知れないが、私と妹の間には特別な意味があるのだ。薄い布団の中で、抜き身を振り回して暴れる父の怒号を聞いていた私たち兄妹は、自分たちも殺されるかも知れないと震えていたのだ。
死の匂いのする家。親は子を守るというが、その親がいつも死の匂いを立ちこめらせていたのだ。

10

春がやってきた。陽差しはあたたかく、雪がとけて、風は土の匂いを運んできた。
猫を家から追い出す時が近づいていた。「さらばじゃ、達者で暮らせ」、と蹴とばしてやると考えている私の心も、にんまりぬくもっていた。
ウニ子が、春のきざしに誘われて発情した。にゃーにゃー鳴いてうるさい。家の前の乾いた舗装道路にあおむけに背をこすって、求愛行動を続けている。雄同士が争いあっている。昼前の雄猫と午後のそれとは違う。こうもはなばなしくと思うほど、とっかえひきかえしている。
「ウニ子、おまえに似て浮気だぞ」
「あんたに、似ているんでしょう」
「馬鹿言え。あれは雌猫だ」
「そう言えばそうね。知らぬは、亭主ばかりというからね」
妻はしゃあしゃあしている。
遅く娘がバイトから帰ってきた。娘の後をついてウニ子が居間に入ってきた。そのウニ子の後をつけてもう一匹馬鹿でかい虎猫が入ってきた。
あまりのずうずうしさに目をむいた。一見そらおそろしい顔をした大猫だったが、よく見ると、気がよさそうでも

のおじしてなく、首輪をしていた。可愛がられているらしい。
私はその大猫を眺めた。どこかなつかしい感じがする。
娘が感心して大虎猫の背中をなでた。
「なあ、サエ子よ、家のウニ子どこか変でないか。この虎とはちがう」
「そうよ、ウニ子は洋猫。こっちは日本猫。日本猫にウニ子みたいな薄茶にブルーがかったものはいない。洋猫は尻尾が長く、胴がほっそりしていて、頭も小さく、脚が長い。日本猫は胴体がずんぐりしていて、頭も大きく、脚も短くて、尻尾が折れている。いま、日本猫の純粋なのはあまりいない。アメリカには純粋なのが飼われていて、いい値で売り買いされているんですって。ウニ子が洋猫だからといって、混じっていて純粋ではない。背中の毛がすこしこげ茶色なのは、日本猫のも混じっている証拠よ」
家の猫博士はなかなか詳しい。
ウニ子がカーブを曲がりきれずに電柱にぶつかったのは、脚が長いせいだと初めてわかった。
私の頭の中に遠い過去の田舎の風景が浮かんできた。
小川のせせらぎが聞こえる低い山裾の田んぼの際には、立ち木で囲まれた藁ぶきの農家が点在していた。納屋の日向で曲がった尻尾を振りながら、寝ながらネズミが出て来るのを待っている猫。ずんぐり胴で、どこか野暮ったいが、気がよく、ネズミを捕って人の前までわざわざ持ってきて、食べていた猫。あまり人間をあてにしない、人のほうもかまわないが、家の中や周りに空気に溶けたようにいた。貧しくて、タクワンまで食べていた性格のいい猫。
もうあんな猫はいなくなったとでもいうのか。
仇ではあったが、いなくなってしまったのかと思うと、何となく寂しい気がする。いい気味のようでもあるし、残念でもある。
知らぬ間に世の中が変わって雑種の猫が幅をきかせていたのだ。
……娘が頭をなでながら、虎猫をベランダの戸を細めに開けて外へ出してやった。虎猫は庭の木陰で一度振り返ってから、青い月の下を闇に溶けていった。私はその大きな背中が名残惜しく、巻いた新聞紙で叩いたらいい音がするだろうなと見送った。
ウニ子がいなくなった。娘が近所を探し回った。
妻がベランダの戸を開けて掃除をしていると、外を眺めていたウニ子が、外も家の中も温度は同じだと気づいたらしく、ぷいと振り返りもせず出て行ったきり帰って来ないという。
「本当に、ぷいとよ。あんなに可愛がっていたのに、もう用はないというように、本当に、ぷいと出ていったきり帰って来ないんだから」

そう言って、妻はとても残念がった。
「あんた、私がいないときいじめたんでないの」
「馬鹿いうな、猫をいじめる暇なんかない」
私は、窓から差し込む陽溜まりの中で、ひやーっとしながら背筋を立てて言った。
春の陽気に誘われ、誰もいない部屋の中で、妻の言うように、新聞紙をまるめて追い回したことはあるにはあった。それ以上に、冬中、階段を上り下りする度に奇声を上げ、娘の部屋にいるウニ子を脅しつづけていた。
変な声を上げても妻と娘にはわからないが、猫はわかっていた。
私は、家の者にはわからないように、いじいじと居心地の悪い思いをウニ子にさせていたのだ。
この性格の陰湿なこと……父とそっくり……。

私の父は、食事どきになると、よく子供を叩いた。居間の猫が私には横柄に見えるように、飯を食わせているのに、ありがたがりもせず、自分と同じものを食べている子供が、横柄に見えたらしい。それで無意識に手が出る。
昔のわが家には祝い事がなかった。家族がみんなで楽しむという心がなかった。
人が楽しむ祭りの太鼓の音を聞こうものなら、父はいらいらして暴れた。子供のころ小遣いももらえず、祭りにも行けなかった口惜しい気持が表に出てきて、子供にあたった。
無論、いらいらしている父のそばに子供がいるわけがない。下駄を持ってはだしで外へ逃げた。終日家には帰らなかった。
田舎の祭りは一日じゅう太鼓の音が山にこだまする。太鼓の音を聞きながら、誰もいない墓場に遊びに行った。子供心にも、祭りに行けない自分たちの姿を人前にさらけ出したくなかった。墓場では塔婆をひっこ抜いて悪いことをした。
父はいつも祭りにも行けなかったと、口惜しがっていたが、自分の子供たちも、祭りに行っていないのは、理解していなかった。
正月になると必ず暴れた父。ぎゃーっとなって母の着物を箪笥からひっぱり出してストーブにくべた。
父の子供のころは正月でも餅は一切れときまっていたという。
祖父は砂糖のこってり入った餡に一升餅をつけて自分一人だけで食べた。肩を落とし首を前に伸ばして喉元を広げ、旨そうに時間をかけてゆっくりのみこんでいたと、父はよく言っていた。それが腹立たしかったのか……それとも餅を食わせてもありがたがりもしない、子供が面白くなかったのか、二斗樽にうるかしていた餅米を、夜中ひっくり返

したことがあった。正月、昔はどこの家でも餅をついた。餅つきをたのんだ若者が来るので、ばらまかれている餅米を朝早く樽に戻さなければならない。一晩、寒中に放置されていたので固く凍りつき、鍬で削りながらすくった。
「親のやったことに不服があるか。ありがたがりもしないで、なんだそのいやいやな態度」
背中を蹴とばされて前へのめった。
父の餅ぐらい、うまくないものはなかった。
子は親の情緒の外側で生きることはできない。
小学一年の子供に米を与え、炊いて食わせろと二歳児をあずけ、いなくなってしまった母親。米が少なく、一年の子だけ多く食べ、二歳は餓死してしまった。一年の子は、母さんに叱られると泣いたという。
子は、どんなに悪い親であっても、その情緒の内側で時間を共有しながら生きるしかない。
子を虐待する粗暴な親の情緒さえ受け継いでいく。
ひどい暴力を繰り返す父親。いつの日か、必ず仇をとってやると思いながらも、自然に似てしまうのだ。
父親に叩かれる子は、ひどくきかなくなる。
……妻と娘を裏切って出ていった猫。もし帰って来たらただではおかない。私は、自分がいじめていたことも忘れ、本気でそう思っていた。

11

窓に濃く切り取られた春の陽差しの中で、私は妻と隣のおくさんの会話を耳にしながら、ぼーっとすわっていた。浮遊する塵が光って見える畳の上の日溜まりはあたたかく、影になっている部分はまだうすら寒い。生まれつき貧乏人の私は、こんな怠惰なことをしていていいのかと、多少うしろめたい感情にとらわれる心地よさだった。
厚い雪に閉ざされた冬場、息をひそめている北海道では、春になると堰をきったように建築がはじまる。今年も建築ブームで、技術者が不足しているといわれていた。まだまだ働けるのだ。若いころ仕事のない冬場は頼んで屋根の雪おろしをさせてもらったり、商店の除雪を請け負ったりして、細々とかせぎながら春がくるのを待っていたものだった。だから、今でも、春になると大きな土方弁当を持って、背をまるめ、自転車をこいで建築現場へ行ったことを思い出し、何となく落ちつきがなくなるのだ。
「……すこし庭をきれいな花で飾ってほしいのですが、家の主人は、花にはなんの興味も示さないんですよ。花を植えるぐらいなら食べれるものを植えろと言うの。庭の木もブドウとグミでしょう」
妻が私の悪口を言っている。窓から顔を覗かせると、隣の美しいおくさんが、春の光のなかで風にそよいでいた。

私は急いで下におりた。花でも植えられたら、たまったものでない。いまイチゴに肥料をやらなければ、甘くならない。アスパラガスも太くならない。そんな忘れていたことを思い出していた。

一冬、自分の心の中に閉じ込もっていた私は、解放感にせいせいしながら、去年の寝倒れているアスパラガスの茎を刈り取り、土盛りをして肥料をやった。イチゴ畑には早くもタンポポが小さなぎざぎざな葉を広げ始めている。この変種のタンポポは私が子供のころはなかった外来種で、背丈が高く、繁殖力がすごく強い。在来種はほとんど駆逐されてしまったらしい。ほっておくとイチゴの領域を限りなく浸食する。タンポポを根こそぎ取っている私の背は陽にあたためられ、ほんのり汗ばんできた。

このイチゴは娘に食べさせたくて、はじめ五株植えたのが広がってきたものだ。娘は虫がついているといって食べない。店から買ってきて農薬のついているのを食べる。虫の五匹や十匹と思うのだがどうにもならない。

私が子供のころ、小さなザルをもって、よくイチゴを盗みにいった。人がすぐ近くで働いているところを、敵陣に匍匐(ほふく)前進していく兵士のような顔をして、息をこらして忍び込んだ。弟と妹が後ろの薮の中で顔だけ出してこっちを見ているので、ザルは一杯にしなければならないし、その間に食べなければならない。イチゴにたかっている虫など見ている余裕がなかった。重くて地面に垂れ下がっている大きいのを口に入れると、土についているほうから穴をあけて入っている蟻をよくがりっとかじった。虫のつくこういうのほどうまいから、そのままがりがりのみこんでしまった。

……娘の食べないイチゴ。それに肥料をやっている父親。馬鹿くさい気もするが、毎年もぎにやってくる嬉しそうな保育園の子供たちのことを思うと、イチゴはもうありませんと、いい振りこいて言えない。

イチゴに肥料をやったあと、私は汗まみれになって、去年の枯れ草をまきこみながらクワで庭をたがやした。おこされていく土のかたまりが陽にあたためられて水分が蒸発していく、ミミズが怒ってもぐっていく。

土の匂いは私に古い記憶を呼び戻させた。

……遠く平地が広がっている、立ち木に囲まれた墓地のすぐそばの畑。その木々の向こうには、シシャモのとれる大河が流れていた。河のむこうは葦の野原で、その遥か遠くに日高山脈がつらなっていた。

墓地の林を根城としたカッコウ鳥が鳴いていた。声はすれど姿はなく、「かっこう、かっこう」と、野面を渡る鳴き声は性懲りもなく繰り返される。巣をもたない鳥が巣を捜しているかのように、執拗に、残酷に、憑かれたように鳴き続ける。

カッコウの鳴き声を背にしながら、追われるように畑地をプラオ（馬で引く鋤）でたがやしている十二歳の私。

畑はやせ地で石が多かった。石でプラオをよくこわした。こわれたプラオをなおすには、一里も離れた町の鍛冶屋まで運んでいかなければならない。往復二時間以上はかかる。無駄骨に近いそういうことは、意外に疲れを感じさせるものだ。

プラオを引く馬はよく逃げた。隣の畑はもう豆まきをはじめているのに、こっちは半分もたがやしていない。子供と思って馬鹿にしてか、逃げた馬はなかなかつかまらない。そっと近づくと、手のとどく鼻の先のところでバカにしたように走って逃げる。五十メートルぐらい先で、また草をはみはじめる。横目で私を見ているずるい顔。近づいては逃げられ、近づいては逃げられ、畑はたがやさなければならないし、馬は逃げるし、腹はへっている。夕闇せまるころそれをやられると、性格が変わるほど腹が立った。相手が馬なのに、自尊心まで潰される思いがした。

土の匂いをかぎながら、プラオでうねうねとおこされていく広い畑とカッコウが鳴く林の、遠い過去の光景を心に浮かべながら、私は夕方まで庭にいた。

「恥ずかしい。父さんたら、そんな格好、しなくてもいい」

学校から帰ってきた娘が降ってわいたように庭に出てきた。手拭いで向こう鉢巻をしてゆげをたたている髭面の父親が、近所の人に恥ずかしく映ったらしい。血は争えないというのか、娘は私の両親に似て見栄っぱりのところがあるから困る。一緒に外へ出るときは背広を着ないと機嫌が悪い。

「腹へった。生鮨でも食べにいかないか」

「行くーっ。その代わり、ちゃんとしてよ」

こっちが金を出すのに、その代わりとは、何なのかなと思いながら、私は娘と並んで家の中に入った。

「父さんの、庭でクワを振り上げるひどい格好ったら、もう……。だけど、畑の中なら似合うかもしれない」

「そうだ、父さんは、頭が向いたほうに、なりふりかまわず夢中になる人だ。若いころ、いつ仕事をやめられるかと、それが心配だった。普通のサラリーマンは職場を失うことを恐れるが、父さんは出たとこ勝負の人だから困る。建築と土木の勉強に夢中になって、頭がそっちに向いていたからよかったけれど。それは、まあ大変。熱くなって、夜が白々と明ける朝方まで机にかじりついていた。実務経験はあるし、それで短大と同じ二年制の職業訓練校に転勤になったんだけど。短大の先生になって、給料も少しはよくなり、やっと落ち着いた」

隣の居間から、そんな妻と娘の会話が聞こえてきた。

私はひげを剃り、背広に着がえた。

「サエ子よ、今日はビールを飲む。おまえが車を運転してくれ」

私は生鮨を目の前にしてビールを飲む自分の姿を想像して、とても豊かな気持ちになった。ビールを飲んだら今夜はもう小説は書けない。いつも自分を律して、創作にあてる時間を最大限にとっている私であったが、近頃、創作意欲がすこし薄れていた。それは暖かい春のせいばかりではない、猫がいなくなった解放感もすこしはあるような気がした。

その解放感も長くは続かなかった。ウニ子が戻って来たのだ。

妻が仕事から帰ってくると、車の下で「ふぁー」と鳴いた。やせこけ声も出ないほど疲れはてていた。それでも警戒したように、もう一度家に入れてもらえるかなという顔つきで見上げたという。

「そんな情のない猫、入れることはない。また出ていく」

私は目を縦にして怒った。

娘と妻が怪訝な顔で私を見た。

私の心の中には、家出していった母の姿が、濃くよみがえっていた。

家事をまったくしない母は、夫婦喧嘩のはて、新興宗教にこってしまった。布教活動に従事するといって家を空けているうち、若い男と仲よくなった。

こうなったらどうしようもない、おっかないものなしの顔になって、家を出て行った。

小さな弟があとを追って泣いた。

私は弟を後ろから抱きしめ、振り返りもせず去っていく母の姿を見送った。

それから二カ月ほどして母が戻ってきた。

日暮れた夜、裏口の台所で妹の名をそっと呼んだ。

奥の座敷の床の間を背にして、「おれの面子はどうしてくれる」と、父は青筋を立てた……どこまでも世間体にこだわる父。

父と向き合った母は、あんたにも責任の一端はある、というように、斜にふてくされていた。

明るい電灯の下、母の足は真っ黒に汚れ、髪はみだれ、見る影もないほどやつれていた。

こういうのは、結局だめになる。一度はもとのさやにおさまったように見えたが、再び母はいなくなった。

「……父さん、いままでいた猫が戻って来たからといって、そんなにきかない顔をして、青筋を立てなくてもいいでしょう。意地悪爺さんみたい」

目の前に立ちはだかっている娘に気づいて、私ははっと我に返った。私は戻ってきた猫に怒りを感じたのではない。

振り返りもせず去って行った母に怒りを感じたのだ。

出て行ったきり、一度も手紙さえ寄こさなかった母。

その母も、もうとっくに死んで此の世にはいない。

死んでしまって、もういなくなった者に腹をたてている自分。

私の心の奥は濃い闇に包まれていた。

死んでしまった両親は、たずねようもない深い闇だけ残して行った。

暖かく明るい家の中で、私はその闇を見つめていたのだ。

……娘が汚れているウニ子にシャワーをあびせた。毛の濡れたウニ子は机の下に来て私を見つめた。耳をうしろにぴたりとつけ、尾をたれ、頭を前に伸ばし、敵意はありませんという顔だった。腹は大きいが体は異様にやせていた。人間の好みに合わされ愛玩用に飼育された血統の猫。荒野を放浪して生きてきてはいるが、人に依存しなければ長生きできない貴族面をしている猫が、人間である私に警戒心をいだいている。

苦労をしましたというウニ子を眺めていると、家出して、一人で生きた混乱した母の心象世界が見えるような気がしてきた。

母は、人に命令し、命令通りに、人は動くものと考えていた。働くことに恥の概念をもっていた。人を働かせ、自分は働かないで支配者として臨まなければ気のすまなかった。金が万事解決すると人を見下すところがあった。

母は一夜成金の地主の娘だった。小さなころは、河縁のむしろ戸の家に住んでいた。

小作人のせがれだった祖父が越後から北海道に流れてきて、初めて世帯をもち拠点をおろした場所が、吹き晒しの川辺の掘っ建て小屋だった。

その祖父が金持ちになった。一つの河川流域の木材伐採を請け負って財を成した。小さな村ならすっぽり入ってしまうほど広い田畑と、馬の群れる山あり谷ありの牧場をもち御殿みたいな家を建てた。わら靴に唐辛子をいれ、風が通らないように背中に新聞紙を入れていた河縁のむしろ戸の家の子が、急に何人ものお手伝いさんにかしずかれる身分になった。

これはわがままになる。

当時の地主は、小作人に対して初夜権があると言われるほど、絶大な権力をもっていた。身分がまったく違う。小作人はいわば農奴的存在だった。

そういう風土の中で、小作人は常に監視しなければならないと教えられ、自分だけは一段位の高い者として、母は育った。

その、わがままな、人を見下げる、先を見通すことのできない母が、無一文にされ、一人で世の中にほうり出され

たのだ。
私たち子供がいないとき父が酷く追い出したにきまっている。
父の兄もやはり子供が一人いた妻を追い出している。叩いて、普段着のまま、擦り切れた台所下駄をはかせて一銭ももたさず追い出した。
母も父からそんな目にあわされたにちがいない。そういう酷いことをする血統なのだ。
家を出された母は夕張炭坑へ流れていったらしい。そこで再婚したとみえ、酒を飲んで包丁で亭主を傷つけ、新聞に載った。それではじめて母のことを私と妹だけは知った。
母恋いのところがある弟には、口を閉ざして伝えなかった。名字も違っていたし、新聞に載った母の写真を見ても、幼くして別れ二十年近くたっていたので弟にはわからなかった。
どうやら母は自分を立て直せなくてひどいアル中になっていたらしい。それで刑も重く長い間刑務所にいたみたいだ。
結婚し子供もでき家を建てた弟はひそかに母を訪ねていた。
「捨てていった人を捜しても後悔するだけよ。寝床で御飯を食べる人だ。サラ金から借金する。家には私たちを育ててくれたフチ（アイヌ語＝おばあさん）がいるんだからね。あとで持て余して、姉さん頼むといっても駄目。たとえ、あんたと私が姉弟の縁を切るようなことになっても、母は絶対に家に入れない」と、叱ってやった。
うら成りなので困ったものだと、妹がそっと私に教えてくれた。
……弟は、捜しに捜して、地方都市の安アパートにいた母をたずねあてた。
母は弟の顔を見ても思い出さなかった。一言も妹や私のことも聞かなかった。母にとっては孫である子供の写真を見せても何の興味も示さなかった。
布団は敷きっぱなし、枕もとには酒瓶や焼酎のボトルが林立していた。周りには食べ物の残りが散乱していて、むかつく腐った匂いが部屋に充満していた。足の踏み場もないそこを、母は「ここに座れ」と言って、垢で真っ黒に汚れたカラスの手でかきわけ、隙間をつくった。おまえも飲めといって、汚い欠けた茶碗で酒だけは飲んだ。あぐらをかいて、酔うほどに前をはだけて、初めて逢いにきた自分の息子にからんだという。
「どうにもなるもんでない、お金を置いてきた」
弟が言っていたと妹は伝えた。
弟の脳裏には、自分たちを捨て山道を上っていった母の姿が、幼い記憶として、そこだけ鮮明に残っていたらしい。
淋しくて恨みの残る光景だ。

恨みがあるということは、その反対側に哀惜の念もあるのだ。
恨みの心を投げかけるにしても、淋しかったと伝えるにしても、どうにもならない、頭の中で想像していた、子を思って涙を流していたにちがいない母親の像とはまったく異なる、本当の母の姿がそこにあった。
弟が初めて会いに行ったときは、すでに母の体は病に冒されていたらしい。その後二カ月ぐらいして肝硬変で死んだ。弟だけは私たちに伝えずに内緒で送っていった。名刺を持っていたらしく、病院から危篤の電話で行ったとき、母はもう顔も見分けられない昏睡状態だった。しきりに「おとっちゃん、おとっちゃん」と、自分の父を呼んでいたという。
死ぬ前、昏睡から覚めた母は、覗きこんでいる弟の髪を両手で掴み、「こん畜生、こん畜生」と引っ張った。弟はそのまま引っ張られていた。手の力が抜けたとき、母はもうはかなくなっていた。
形見の一つでもと、母のアパートに整理に行った。ガスも電気も水道も止められた部屋の中は前よりひどく、嘔吐物が散乱し、水の出ない水洗便所には糞が盛り上がっていた。形見の物など持ってこられる状態ではなかったという。
どうやら母は、法律的に悪くなければ何をしてもいいという、感情の枯渇した人間になっていたらしい。刑務所でそういう生き方を覚えたのかも知れないが、眠れないと精神病院に通い、時に奇声を上げて目をすえて歩き、生活保護を受けて暮らしていた。
夜中じゅう酒をのんで騒いだ。執拗に隣の壁を叩き、階下の人を寝かせないように床を鳴らし続けた。蛇口を開けっぱなしにした。
こんなことをされたら、誰だって怒る。怒って文句をいうと、尻をまくってそれ以上怒った。文句を言った人の玄関先に光る刃物を置いてくる。人を傷つけ、目のすわっている者にそんなことをされたら、たとえそれが女でも気持ちが悪くなる。みな引っ越していなくなり、アパートはがら空きとなる。
母にとって、これは計算された予定の行動だったらしい。無論、部屋代など払うわけがない。
部屋代も払わないこういう人間を追い出すのは、法律的には困難なことらしい。たとえ裁判所から呼び出しの手紙が来ても出ていかない。内容証明の手紙を出しても受け取らない。こういうことはすべて民事で、警察とは関わりのないことなのだ。無理に部屋から追い出そうとすると、住むところのない弱い者を出すのかと基本的人権にかかわり、その方の法律が優先される。
こういう人間を追い出すには、代わりのアパートを捜してやり、荷物まで運んでやって何十万かの金を握らせなけ

ればならない。母は半年に一度ぐらいの割合でアパートを転々としながら、優雅な暮らしをしていたらしい。

生活保護が打ち切られると、酒を呑んで腕を刃物で切り、血を浴びたようになって、人通りの多い繁華街でひっくり返った。

これ見よがしの自殺未遂である。

警察では、血を流して倒れている女に、事件に巻き込まれたにちがいないと、救急車を呼び病院に収容する。泥酔からさめて、支払う病院代もなく、生活保護を受けていた者となると、市の保護課に連絡される。精神病院に通い、黙っていたら死ぬかもしれない法律的事実の前に、保護課では生活保護を出さざるを得なくなる。

「えらいのにひっかかった。人が誰でも持っている共通の道徳感がないから困る。みんなの税金で保護を受けているくせにありがたがりもしないで、税金を納めている善良な周りの人に迷惑をかけ、まっ昼間から酒を飲んで、大威張りで生鮨食っていた」

アパートの持ち主は、まいった顔で、こういう母の行状を語ったという。

北海道の真冬、食べ物もなくなり、電灯もつかない暗い部屋の中で、布団にもぐって母は何を考えていたのか。包丁で六カ月の重傷を負わせた男のことか、それとも父のことであったのか。父は見た目は姿がよくいい男だった。見栄っぱりで、百姓などに嫁にいけるかと気位の高かった母は、喜んでエリートの父の元に嫁いで来た。高慢な顔で大金持の娘として、父の頭の上に乗っていたのは事実であったが。しかし、愛し信頼し頼りっきりになっていたのは、何もできない人間なだけ、一途であったような気もする。

それを、母の父、私の祖父が死ぬと、父は手の裏を返すように母を冷たくあしらい、殴りはじめたのだ。

祖父が信頼し、自分の娘の連れ合いである父に買い与えた、田畑や山林はどうなったかわからない。本当はそれは母のものなのだ。

今になって考えてみると、家を出て行った母がいちど戻ってきたのは、それを取り返しにきたからではないか。

義理も人情もなく、計算高い父は名義はおれのものになっていると渡さなかったにちがいない。

刀折れ、矢つき、心底疲れ果て、ぼろぼろになった母は、一銭も持たされずに家を出された。

破産した伯父が尾羽うち枯らして家に来たとき、飯も食わせないで追い出したように、父は出て行く母を、鼻の孔を広げ、嬉しそうに、馬鹿にしたように、得をしたというせせら意地を張った顔で、眺めていたにちがいない。

継母に育てられた父は、さげすみ自尊心を傷つける性癖のある人間だった。

こういう人間が、優しく誠実で、愛と真心に彩られた、

人恋しい詩を書くのだから、その二重人格性にまいってしまう……そのころ三行半（離縁状）で自分の妻を追い出せる風潮が、まだ色濃く残っていた時代だった。

母は欠陥人間であったのは確かだったが、しかしほんのまだ子供の、数え年十六歳で嫁に来、信頼し頭がいいと自慢し頼っていた夫に、そんな目に遭わされたら、もう真っ直に人生は送れなくなる。恨みの情感だけ色濃く残って、夜も眠られなくなって人とは争いをおこすようになる。母に刺された男は、本当は父の身代わりになったのかもしれない。

こう考えてみても、やはり母は嫌だ。そそ毛だつ……降って湧いたように母がそばにいて、ぎゃーっとなって窓をまたいで逃げる夢をよくみたものだが……父との争いに負けそうになると、自分から仕掛けることもあったくせに、妹を盾に使うのだ。

母性を欠いた、ここのところが許せない。

妹は興奮している父にひどい目にあわされる。まだ死なないと計算して、父はその限度まで小さな妹を虐待した。こんなことを計算する親がいるであろうか。激情にかられているので……女性そのものに対して不信の念でもあるのか……生身の尻に、鈍色（にび）の斑点がいくつも重なるまでつねる。いじいじといじめ抜き、計算の限度を通り越してしまう。

妹は泣くこともできなくなり、白目をむいて「あぁ、あぁ」と、オウム返しになって、自分を見失ない、正常な反応を示さなくなる。

いじめはじめると、父は高揚感に襲われて来るようだった。ヒステリー症の激情と同じで、ひと思いに殺したら、いい気持だろうなという顔つきに変わってくる。

私もよく叩かれ、煙草の火を押しつけられた。心底、腹が立った。殺される前に殺す。小学生でも六年生ぐらいになると、狙う目つきをして未来の破局を見詰めるようになってくる。

父は運のいい男だ思う。家族の者に人生の不満をぶつけ、自分の思い通りに自己を再生させながら、社会に対する自己顕示欲を満足させて死んだ。もう二、三年父と暮らしていたらどうなったかわからない。

子供心にも、寝ている父の頭に漬物石を落としたらどうなるか、私は知っていた。

突発的にわけもなく殴られたりすると、そういう思念が現実味をもって迫ってくる。

妻と子供を殺した裁判官がいるというが、父もそういう類の男でなかったかと思う。

アメリカの心理学者が調べたところによれば、自分の子や妻を殺した男の中には、顕著な類型として、知能指数が高く、社会では指導的立場にあるものがかなりいる。そういう男は、一様に地位欲名誉欲が極端に強く、自己を顕示

するため社会に適応することを第一義として、それ以外のことは、いっさい何の考慮も払わない。内面は、不安と、不信と、死の淵に立っているような抑圧の中で混乱している。社会から隔離されている家庭の中では、その混乱が表に出てきて、常識など歯牙にもかけない暴君となる。不意に突発的に理解不能行動をおこして暴れる。自分でも理解できない興奮の中で計算違いをして、妻や子供を殺してしまうという。

突発的に刀を抜いて暴れた父。出会い頭にいきなり叩かれたものであるが、なんで叩かれたのか、いまだに理解できない。

毎日、夕食が終わると、居間に座っている父の目がすわってきた。ほっと腰を落としてくつろぐ家庭団らんのとき、子供のころの満たされなかった悲しみや、思うように地位があがらない不満が、狂おしく頭をもたげてくるみたいだった。酒を飲んでいるわけでもないのに、泥酔者のような怒りに燃えたねばっこい目つきになり、暴れはじめた。

どんなに暴れているときでも、人が来ると、百八十度回転して、とたんに笑顔になるから、その変わり身のはやさは不思議だ。

だいぶ前のことであるが、真冬うす着の子供を夜中の吹雪の中へ追い出した父親が、新聞に載ったことがあった。小学一年の小さな姉は、それより小さな弟を寒さから庇って、吹雪の中にうずくまった。追い出した父親は、ちょっと計算違いをして、そのまま眠ってしまった。姉は死んだが、弟の方だけは、辛うじて生きることができた。

自分の子供を殺したその父親は外面がいい男だったのか、町内から減刑嘆願運動がおきた。世の中の人は、内面と外面の違う、二面性のある人間がいるのはわからない。

子供は知っていたのだ。殺される恐怖にいつも怯えながら、姉と弟は肩をよせあって生きていたのだ。子供にとって逃げ出す場所もないし、助けを求めても、助けてくれる人はいない。言ってもわかってもらえないのである。そしてその不安の予想どおりに姉は殺されて死んでいった。

父は、私たち実の子をあれはど虐待しながら、さほど悪いことをしていると思っていないところがあった。反対に、同じものを食べているのだし、優しい父親と自己評価している気色さえあった。

子供を虐待する父親と、そうでないときの父親とは、人格がことなるので、片方が出ると、もう一方はひっこみ、遠いものを眺めるようにあまり覚えていないみたいだった。

自分の子供を雪のなかに追い出し殺した男も、涙を流して後悔しているときは、もう一方の雪の中に出した激発の人格はひっこんでいるので、ちょっと間違えたということになりかねないのだ。

ちょっとのところに子供の生き死にがあってはたまらない。

四歳の子を殺した親がいる。体の痣を児童相談所などが調べても判断できなかった。そういう親は愛にみちた優しい顔を他人に演出するし、うまい逃げ道をあらかじめ用意しているのだ。

四歳児はじわじわと虐待され殺されていったのだ。

……親戚の夜はあたたかかったと、やはり思う。不安から解放されてぐっすり眠った。寝小便もたれなくなったし、どうしてあんなことをしたのかと思うほど、泥棒癖もなくなった。馬車馬のように働いたが、そんなもの苦労なんかでない。両手を合わせて拝みたいほどありがたいことだった。

だから、「兄さん生きのびてこれたんだから、長生きしましょうね」と言う妹の言葉は、私の心に痛切なものをともなって響くのだ。漬物石のことを考えると、あのまま父と一緒にいたら、私の方が殺すほうに回っていたかもしれない。

両親に対するこういう切実さは私と妹だけで、弟には少ない。父の矢面に立ったこともなかったし、幼くして別れて記憶も薄れてしまっていたらしい。

母のことを考えると、よくまあ、自分に合った生き方をみつけたものだと思う。他人には悪いが、やはり渡る世間に鬼はいないのかも知れない。

……明るく幸福な部屋の中で、ぼーっと暗い過去の世界をさまよっていた私の目に、ウニ子がストーブの横で寒そうにちぢこまっているのが映っていた。母の高慢で不幸な人生を想いながら……病院で死ねただけいい。本来なら、糞小便凍りつかせたまま冷たくなっていたはずだったと、何となくウニ子の死が近づいているのを感じていた。

痩せ過ぎていた。胎の子は死んでいるにちがいなかった。

12

私は録画したビデオにぼーっと目を向けていた。

外は雨で、夜風が空をきしませて吹き過ぎていた。

猫は雨の中に出て行っていない。

隣の六畳間で、娘と妻がしゃべっている。明日、娘がバイトに着ていく着物の相談をしていた。

娘は妻の情緒を引き継いでか着物好きである。着物好きな娘はつり目だった……中国のどこか、孟宗竹がびゅーっと空にむかって生えている処があって、そこに凄いつり目をした人たちが住んでいるというが……一将、功なって万骨枯れるという目である。

妻は親馬鹿で、つり目で色白で唇がとがったまる顔は着物が似合うと言い、いつも自慢していた。私は、妻が若か

ったときのほうが美人だったと思うのだが、そんなこと、娘に言えない。

妻の勤めている店で催事があると、着物を着たつり目の娘がモデルとして狩り出されていく。何のことない、店の前でうろうろ立っているだけのことらしいが、いい金になると親子でかせいでいた。

ときどき、鋭い驟雨が窓を叩く。ごうごうと夜空を渡っていく風の音を心にとめているうち、私の目はテレビから離れて、何となく昔を懐かしく思い出していた。

中学を卒業した妹が、風呂敷包みを背負い弟の手を引いて、赤い頬に嬉しそうな笑みを浮かべて私の所に来た日も、こんな嵐の夜だった。雨に叩かれ、風に押されて駅に迎えに行ったのでよく覚えている。

離れ離れになって六年たっていた。

それがまたやっと、一緒になることができたのだ。都会に出ていた私は十八歳で、二間のおんぼろアパートだったが、三人はだんごになって暮らした。食べ物がなかった時代で、イモとカボチャとイワシばかりの日が続いたが、何となくぬくかった気がする。

働くという妹を無理に高校へあげた。そのころのことはあまりよく覚えていない。私にとっては激動の期間だったような気がする。ただ前を向いてがむしゃらに働き続けた空白の思い出が残っているだけだった。

そして生活もだんだん楽になると、まず妹が抜けて高校の先生になった。その二年後、弟も大学を卒業して就職した。

広い部屋の中、やっと役目を果たし、はだか電球の下でぼーっと座っていた記憶が残っている。

そのぼーっとした私のまぶたの中に、若かったいまの妻がいたのだ。

私が喧嘩をして辞めた建設会社に、そのころ妻は勤めていた。

もう二年も逢っていなかったが、私は会いにいった。雪の降り始めるころで、仕事終いの日だった。電車に乗るとそう時間はかからないが、遠い道を私は歩いて行った。夕暮れどきで、藍にみちた空気が見えるように降りてきていた。空の雪雲が街並みにくっきり切りとられて広がっていた。

もう結婚して、いないかも知れない。

肩に背負った大工道具がずしりと重かった。それは大工道具の重みでなかったのかもしれない。

やがて日もとっぷり暮れ、みぞれが降りはじめた。みぞれで濡れた歩道を、水溜りをよけもせず、地下足袋を濡らしながら、私は真っすぐにずーっと歩いていった。

暗く湿ったみぞれの中を歩いてきた私の目には、建設会社のビルの中は妙に明るくて、面はゆく乾いて見えた。

その明るい事務室の、大きな植木鉢のシュロの葉陰に、若い妻がまだそこにいた。髪を後ろで結び、紺の事務服を着て、赤い口紅をつけていた。

翌年の春、私たちは結婚した。

柔らかくて、それでいて、しゃきとしていて、崩れたところがない、私の母とは性格のまったく違う女性を嫁さんにすることができた。

結婚したてのころの私は、おれについて来い、というようないい振りこきだった気がする。もしかすると、亭主関白だったかも知れない。

亭主関白などというものは、女性からみると、痩せ馬の先走りみたいなものらしい。

どうやら、泡吹いて真っ直につっ走る痩せ馬の私を、妻が後ろから柴叩いていたような気が、今になってする。

男は、こういうことが、意外とわからない。

痩せ馬は真っ先につっ走ると、脚がもつれてしまうことがある。男の世界、嫌になって、こんな職場やめてしまえと思うことも度々あった。喧嘩早くて、あわてもので、おっかないものなしの、私みたいな人間にはそういうことが多いらしい。

こういう状態にある私を、妻は妙に感じとってしまうところがあった。

「父さん、疲れているんでない。世の中自分一人でない。仕事をなんでもかんでも抱え込んだら駄目よ。ほどほどにするんですよ」

こう優しく言われて、ビールでも出されると、ずしりとした肩の重荷が半分になる。

そして、ぐっすり眠って、ぱちりと目が覚めて朝になったら、疲れなどどこかにふっ飛んで、昨日のことも忘れ、また職場に勢いよく走っていく。

どうして、こうなったか、人間が単純過ぎるのか。

こういうことも、退職して、後ろを振り返ってみて、何となくわかるのだから遅すぎる。

一度だけ妻が私の前に出て来たことがあった。職業訓練校の教員の口がかかった時である。

「給料取りになど、なれるか」

私は言った。その頃の地方公務員の給料はバカ安くてなり手がなく、普段私が稼いでいる三分の一ぐらいだった。

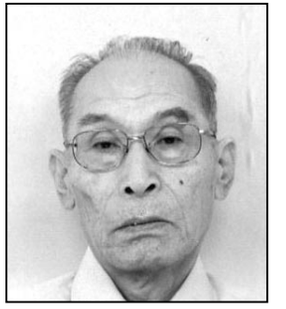
「少しぐらい給料が安くても永続性のある仕事の方がいい。大工は怪我の多い仕事だから、いつ屋根から落ちるかと心配で……それは、父さんの建設会社をつくりたいという希望もわかる。だけどあんたは周りの人の思惑を考えない。つり目をむいて、口をとがらせて一人だけ前を走っていく、気がついたら後ろに誰もついて来ていないということになりかねない。

単純で、あわて者で、口が悪くて、喧嘩早くて、そんな

あんたが会社をつくってうまくいくかしら」
こうぐさっと言って、妻は私の前に斜に座ってがんとして動かなかった。人を傷つけることは性格的に言えない妻に、真剣な顔で言われると妙な説得を感じる。心配させていたんだなと、感情が高ぶって抱きしめてしまった。それでうっかり乗せられて勤めに出てしまった。
どうやらこの時、蹄をかちゃつかせて走る痩せ馬の私は、目の横に、前しか見えないように覆いをつけられたらしい。そして気がついたら三十年たっていた。
損はなかったが、もうけそこなったような気がしないでもない。反面、教師という職業は教室の中に入ってしまえば、おらが天下の世界で、私のような一匹狼には、個性を曲げられることもない、もっとも適した仕事であったような気もする。
妻は、私を、私の理解できないところで飼い慣らしてしまったらしい。
後ろにいると思っていた妻は本当は前にいて、私を引っ張っていた。信頼感というのかそれとも一体感なのか、うずくまってほっと溜め息をついて、夫婦ってこんなにいいものかと思わせてしまった。
仕事が終わると夕日を見ながら真っすぐ帰った。何も考えず、それが当然なように、そして家に入ると、人間丸出しになってくつろいだ。
ぬくくて、柔らかくて、息をしていて、こういうのは本当に気持ちがいい。そこからもう動きたくなくなる。男の冒険心も薄れ大きなことは考えなくなる。五分ノミを持って父を追いかける夢も見なくなる。
……隣の部屋の、ゆったりした妻の話し声を耳にしているうちいつの間にかビデオは終わっていた。
その間、私はぼーっと何をしていたのか……私がテレビを観ていたのは、東南アジアに発生したタロ芋の農業文化が、縄文時代に日本に伝播して来たであろう、食物の道を知るためだった……この道こそ、南方系の美しい民族であるアイヌの人たちが来た道だと言うのだ。
もう一度観ようとビデオの巻戻しをしていると、娘が「父さん、テレビ観せて」と隣の部屋から出てきた。これで終わり。娘は、イタチが木の穴に首を突っ込んで雛を捕っていくように、私からテレビを取り上げてしまった。テレビの占有権は娘が握っている。子供のときがそうだったので、大人になっても続いて同じなのだ。娘からテレビの占有権を取り戻すには、過去にさかのぼらなければならない。それは出来ない相談だった。
「おい、おまえのウニ子、嵐の中をほつっき歩いている。大丈夫か……」
私だって意地悪くなる。

「そのうち、戻ってくる。心配ないって」
娘と妻はもうテレビに夢中。ふたりともサスペンス狂だった。こんなとき文句を言ったら、こっちがサスペンスにされそうなので私は黙った。
サスペンス狂のふたりは、獣医からもらってきた薬もなくなって猫がどんなに弱っているかわからない。
胎の子は死んでいる。
野生を知っている私にはそれがわかっていた。
私は、弱ったウニ子が何かを懐かしむように、嵐の中を彷徨しているように思えた。それは過去の荒野のような気がしてならなかった。
その嵐の日から三日間ウニ子は戻って来なかった。
三日目の夜遅く、「ふにぁー」と窓の下で喘息の声で鳴いた。耳敏く娘は階下に下りていって抱いてきた。
「母さん、ウニ子なんにも食べない。弱っている」
娘の声に寝ていた妻が起きてきた。
「よしよし、こんなに痩せて、明日病院に連れていってやるからね、がんばるんだよ」
妻の声に、私も廊下に出ていった。
猫の顔はとがっていた。痩せ過ぎるほど痩せた顔で私を見た。そして、私を見たあと、背中を撫でている妻の手を離れて、尻をみせながらふらふらと階段を下りていった。
この家では死ねない誇り高いのら猫だった。また旅に出ようというのだ。
「母さん、ウニ子、外へ出て行った。呼んでも戻って来ない」
階下についていった娘が戻ってきて言った。
私の目には闇に溶けていくウニ子の痩せた姿が映っていた。
何故、戻って来たのか。いちばん可愛がって、同じ布団に寝ていた娘を最期に一目見たかったのか。
「……父さん、なんだか恐い。外で変な声がするよ」
うとうとしかけていた私は、廊下でそう呼ぶ娘の声に目を覚ました。起きていくと、娘の部屋の窓は開けはなされていた。どうやらウニ子が帰って来ないかと、庭を眺めていたらしい。
ふたりは並んで外を見た。
街並みを覆う都会の空は、光を反射して妙に明るく、そして暗い影をつくっている家並は奥深い感じで静まりかえっていた。
「ほらね、聞こえるでしょう。へんな声」
「チャボの子っコが鳴いているんだ。喙(くちばし)の黄色い子っコでもほかにオスがいないと時を告げる。チャボって鶏の小さいやつだ」
都会のどまん中でチャボを飼っている人がいる。薄紫に染まっている明るい空の下で夜明けを告げている。その分

だけ、家と家の間にある陰はしんと暗かった。
その闇の中をウニ子は歩いていった。自分に生を与えてくれた荒野を求めて。死が近づいていると感じたとき、赤びっきの自分を生かしてくれた場所を再び捜して、昔に戻っていったのだ。
家の猫には荒野を生きた記憶は消えているが、だれにも頼らず自分だけで生きてきた経験は残っている。
その経験の中を、何かを求めて彷徨しているにちがいない。
育ちが悪かったウニ子。
私の目には、遠い月を恋うるように眺めながら、朝露に濡れ、どこかの葉影で冷たくなっていくウニ子の力つきた姿が映っていた。
茫々とした都会の薄闇を乱して、チャボがまた鳴いた。



小林和太

こばやし　かずた

1929　北海道苫小牧市に生まれる
47　苫小牧旧制中学校卒業
サラリーマンを経て商店経営。その他貸店舗業、アパート業など職業雑多。
90　肺癌、スイ臓癌の告知を受ける。
91　早稲田文学新人賞を受賞。その後、手術を受け意識を失う。低酸素脳症となる。
目もあまり見えなくなる。
2008　16年の期間を経て目が見えるようになる。
09　「後ろ影のない男」で第5回銀華文学賞受賞
夫婦二人暮らし、一人娘、別居
「札幌文学」同人

まほろば賞 スポンサー募集

まほろば賞を支援して下さるスポンサーを募集しています。賞金・記念品などご提供していただける方がいらっしゃいましたら、ご連絡下さい。1口1万円で御支援いただけましたら幸いです。
アジア文化社五十嵐勉までご連絡下さい。
TEL&FAX03-5706-7848
郵便振替 00140-9-770331
名義アジア文化社

☆「文芸思潮」は左記の書店で店頭販売されております。
【東京】
ジュンク堂池袋本店
紀伊國屋書店新宿本店
【富山】
紀伊國屋書店富山店
中田図書販売

広告募集

「文芸思潮」に広告を掲載しませんか。
「文芸思潮」の広告をどうぞご利用下さい。
文芸関係者に告知・広報効果があります。
「文芸思潮」ウェーブ

1／6広告　4000円から
本号
1／4広告　5000円から

ご相談に応じますので、
お気軽にお問い合わせください。
TEL&FAX03-5706-7848
文芸思潮　アジア文化社